
真・恋姫†無双（仮）

零戦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双（仮）

【Nコード】

N8698L

【作者名】

零戦

【あらすじ】

目を覚ましたらいきなり変なところにいたけど、相手は神様！？
神様のせいで死んだ俺はテイルズの技と魔法、日本刀を貰って恋姫の世界に……。

ルートは袁術（多分）になりますが、ヒロインは三国の王ではありません。

オリキャラ、オリジナルストーリー、ハーレム、ギャグ、ほのぼの、

チート等でご都合主義です。また、テイルズ技、テイルズキャラ、日本人が出る可能性が大です。

劉備アンチです。劉備アンチが嫌な方は戻れのボタンを押して下さい。

架空戦記がメインなので更新は遅いです。

プロローグ(改)

「突然だけど、貴方は死にました(笑)」

「……………は？」

といきなり目の前にいる白人っぽい男性に言われた。

「てかあんた誰や？」

俺は怪しそうな青年っぽいのに声をかける。

「僕かい？……フッフ、僕はね……神様さッ!!」

「……………」

「う、嘘じゃないさッ!？本当だよッ!! だから僕をそんな目で見ないでくれッ!!」

なんか自称神様が俺に訴える。

「まあそれは置いて。何で俺死んだんや？」

「置いとかないでよッ!!……ンン、まあ……その……僕の部屋にあった花瓶がたまたま落下してたまたま君に当たったのだよ」

「いやいやどんな確率やねん」

一応ツツコミを入れる。

「まあそれはすまないと思うよ。それでね、君を元の世界に戻すのは無理なんだ」

「何でなん？」

「歴代の神々が決めたルールさ。それに君がいた世界では既に君の肉体は消滅しているからね。そのかわり罪滅ぼしなんだが、平行世界に行かないか？」

「平行世界でパラレルワールドてやつやろ？」

「まあ一応正解だね」

パラレルワールドか……。

「勿論ただで行かすわけじゃないよ。武器から何らかの能力、服まで君に授けるよ」

「マジでッ!？ Σ (∇ ;)」

「本気と書いてマジ」

ほんなら……。

「テイルズシリーズの技とか魔法とか全て使えるようにしてえや」

「いいよ。……はい完了」

神様が右手を俺の頭に載せただけで終わる。

「んじゃ次は日本刀くれ」

「分かった」

神様が日本刀を何もない空間から出した。凄いな。

俺は貰うと鞘を開けた。

「蒼いな」

「僕が作った特別の刀だよ。血も付かないし、折れないように作ったからね。刃毀れはたまになるけど」

「いや、これは何か勿体ないからピンチの時に使うから普通の日本刀欲しいねんけど……」

「しょうがないな……ほら」

神様がさつきと同じように日本刀を出す。

とりあえず確認な。

「うん、普通の日本刀やな」

「その代わり、普通の日本刀のより折れないようにしたからね。そ

れくらいはいいだろ？」

「まあそんなくらいやったらええな。少し練習させて欲しいねんけどええか？」

「いいよ」

神様が指をパチンと鳴らすとテイルズでよくでるウルフが出てきた。

「ガルルルル」

「とりあえず先手必勝やッ！！ファイヤーボールッ！！」

俺の上から火の玉が飛び出てウルフを襲う。

「ギャピィッ！！」

ウルフが変な声を上げて青白い光りになって消えた。

「どうだい？」

「ほんまに出来たな」

「信用していないのかい？」

「そらいきなり貴方は死にましたとか言われたら信用できひんて」

「それもそうだね」

「もうちょい練習してええか？」

「いいよ」

——三ヶ月後——

「随分とここにおったな」

「そのかわり技や体力がチート級になったけどね」

神様が苦笑する。

「てか俺を何処に送るんや？」

「さあ何処でしょう？」

神様がパチンと指を鳴らした。

パカッ

「へ？」

いきなり俺の下に穴が開いた。

「頑張ってね〜〜〜♪」

「ちょいまってやアアアアア〜〜〜……………」

「天城長門よ、運命のよき旅を……………」

神の野郎の言葉を聞きながら俺は落ちていった。

絶対あの野郎シバいたるからなッ!!

「んでさ……………ここ……………何処や?」

俺が目覚ますと知らない天井やなくて砂埃が舞っている荒野やっ
た。

「……………北〇の拳の世界か?」

俺あんま知らんで……………。

ん?なんか人っぽいの見つけ。

「……………の……………けて……………じゃ……………」

「お……………に……………い」

よう聞こえへんな。

近づいてみるか。てかどっかで見た影やなあ。

「十数人ほどおるな……………ん?」

瞬間、俺は立ち止まった。

俺が見た光景は幼い幼女が男に剣を突き付けられていた。

俺はいつの間にか日本刀を取り出して、人間の集団に向かって走った。

——?? サイド——

……失敗しましたね。まさか文官の韓胤までもが裏切ってたなんて……。こんな事になるなら素直に零さんの言うことを聞いとけばよかったですね。

「さあどうしますか張勳殿？我等に従うと宣言すれば愛しい袁術様を返しますよ。くつくつく………」

武将の雷薄が私に尋ねてくる。

「……………」

「おやおやだんまりですか？なら、袁術様は少し痛い目に会わないといけないですね」

ニヤニヤしながら同じく武将の楊奉が美羽様に突き付けている剣を喉元に突き付ける。

少し刃が喉に当たったのか血がツウッと流れ出ている。

「な、七乃お……」

「御嬢様ッ!!」

くッ……やはりここは従うしかないですね。

私はそう思い、構えていた剣を地面に突き刺そうとした時、御嬢様に剣を突き付けていた楊奉の首が飛んだ。

——張勳サイド終了——

プロローグ(改) (後書き)

展開早いですね f ^
| ^ ;

第一話 袁家の主と部下（改）（前書き）

展開が早いです。

第一話 袁家の主と部下（改）

——長門サイド——

おゝ、ほんまに首って人体の中で一番弱いてほんまやねんな。

まあそれは置いといて。

……やっぱこの世界は真・恋姫無双の世界やねんな。

なんせ目の前に袁術と張勳がいるしな。感動もんやわ。

「き、貴様何者だッ?!」

ちい、人が感動してんのにうぜってえ奴やな。

「おめえらに名乗ったて意味ねーやろ。どーせ今から死ぬんやしな」

そういうと俺は袁術を抱え、張勳の元に行く。

「御嬢様ッ!!」

「七乃おゝ、恐かったのじゃ」

二人が抱きしめあう。

「フン。どうやら貴様はこの場を見ていないのか？」

文官っぽい男が右腕を上げると三十くらいの兵が俺に槍を向ける。

………しゃあないな。

「いきなり秘奥義出るかな……ハアアアッ！！」

おゝ、オーバーリミッツが発動したな。てかマイソロッ!? Σ（
㐤。）

「な、何だッ!? よ、妖術かッ!?」

よし、敵が驚いてる今が好機やッ!!

「ハアアアッ!! 全てを滅し、無に戻せッ!! シヤイニング・バ
インドッ!!」

光りの波動が兵や文官に襲う。

『ギャアアアアアッ!!!!』

あ、全員がやられた。

まさに一撃必殺やな。マイソロでもそうやったしな。

「大丈夫か？」

全員が死んでるのを確認すると俺は袁術と張勳に問う。

「え、ええ、何とか助かりました」

「うむ、ありがとうなのじゃ」

「ところで貴方は一体……」

「ああ、俺は……うゝんここやと姓は天城、名は長門。真名やつけ？それはないから長門が真名になるな」

「なッ！？初対面でいきなり真名を言うのですか？」

「まあええやん」

「はあ……」

張勲が思いつき怪しんでる。

そらそうやろねえ。

「何じゃとッ！？お主は真名がないのかや？なら妾も真名を言うのじゃ。妾は名家である袁家の君主、袁術じゃッ！！真名は美羽じゃッ！！」

「お、御嬢様ッ！？」

張勲が驚きの表情をして袁術を見る。

「い、いいのですかッ！？」

「何を言うのじゃ七乃。妾達は長門に助けてもろたのじゃからそれくらい言わんでどうするのじゃ？」

……なんかこの世界の袁術は頭賢いなおい。

「……分かりました。御嬢様がそこまでおっしゃるなら私も言いましょう。私は姓は張、名は勲、真名は七乃です」

「別に無理しなくてもいいで張勲」

「いえ、御嬢様が真名を言うのであれば当然部下である私も言うべきです」

……こんな性格やったけ張勲って。

「分かった。なら真名で言わしてもらおうわ」

「ところで二、三点質問をしたいのですが宜しいですか？」

「ええよ」

「なら、貴方のあの妖術らしき物は一体何ですか？そして貴方の服装は我々より違います。凄く怪し過ぎます」

そらそうやろな。目の前であんな技を見せられたらな。

「あれは妖術ちゃうで。あの技はな我が一族に伝わる流派なんや」
流石にテイルズの技とは言えんしな。

「この服装やけど……うゝん、お前らの国からずーっと遠く
かなーり近い国の服装や」

服装は普通の私服やし。やべ…無茶苦茶苦し紛れや……OrZ。

「遠いが近い国……まさか貴方は占い師の管輅が言っていた天の御
遣いですか？」

「はにゃ？七乃。天の御遣いて何じゃ？」

袁術——美羽が首を傾げる。

「洛陽の占い師の管輅が『この乱世を収める天の御遣いが流星と共
に大陸に舞い降りる』と予言したのですよ……って昨日の勉強の時
間に私が言いましたよね？（笑）」

ゴゴゴゴゴゴッ！！

「あ、ああ思いだしたのじゃッ！！だからその笑顔で妾を見るでな
いッ！！」

……七乃恐ッ！！（（。D。11））てか般若ッ！！

「てことは長門は天の御遣いなのかや？」

「まあそうなるんちゃう？」

「オオーッ！！それは凄いのじゃッ！！」

美羽が目をキラキラさせてる。

そんな目で俺を見るなよ美羽。むっちゃ抱きしめたくなるやんか。

「長門、妾の部下にならんか？欲しい物何でも揃えてやるのじゃ」

「いや部下はええわ。客将くらいやったらええよ」

「……天の御遣いをこちらに引き込めば美羽様は安泰ですね」

おい七乃さくん、聞こえてるで〜。

ドドドドドドッ！

その時、遠くから地響きが鳴り響いてきた。

だんだん近づいてきたな。てか砂塵が多いな。

「あ、零じゃッ！！」

美羽が『紀』と書かれた牙門旗を見てはしゃいでいる。

「『紀』？……ああ紀霊か」

「……ッ！？何故紀霊さんを知っているんですかッ！？」

七乃がつかみ掛かるように俺に問う。

「まあ三国志を見たからな」

「三国志？」

「後で教えるわ」

「美羽様ッ！！七乃ッ！！無事かッ！！」

現れた部隊から一人の女性が叫びながらこちらに来了。

「おおッ！！二人とも無事であったか。……ん？お主は誰だ？」

黄蓋のようなボンキュボンのお姉さんが話し掛けてくる。

「零、長門は妾達を救った命の恩人じゃ」

美羽が紀霊（零）に事情を話す。

「そうだったのですか。いやこれは申し訳ない。儂は紀霊。美羽様達の味方じゃ」

「これはどうも。天城長門て言います。真名が無いので長門て呼んで下さい」

俺は紀霊と握手する。

「とりあえず城に戻りましょう」

七乃の言葉に俺達は美羽の居城に戻った。

「改めまして美羽様と私を助けて頂き真にありがとうございます」

七乃が俺に臣下の礼をする。

「儂からも礼を言おう。ありがとう」

紀霊も俺に臣下の礼をする。

「いや、別にそんな事をせんでもええねんけどな。てか何で七乃と美羽は襲われたんや？」

「……お嬢様はまだ幼いので政治の全てを理解しきれてません。そこへ自分の腹を満たす事しか考えてない文官の韓胤や武将の雷薄達がお嬢様を人質にして我々を脅しているのです」

昔も今と変わらんなあ……。

「分かった。さっき美羽にも言ったけど、配下に加わるのはあんまり好きやないから客将ならええよ。微力やけど俺も手伝うわ」

七乃は俺の言葉に涙を流した。

「ありがとうございます長門さん……」

「てかさ、美羽に忠誠を誓ってるのは七乃と紀霊だけなん？」

「儂の事は零で構わん。残念じゃが……今はここにいないが李豊りほうと楊弘ようこうは味方だ。後は美羽様を暗殺するような輩だけじゃ」

零が俺に詳しく話す。

「そうか……。ならさ七乃、一か八かの賭けをしてみいひんか？」

「どんなのですか？」

俺は七乃に耳打ちをする。

「……まさに一か八かですね。やってみましょうッ!!」

七乃は零と美羽に説明する。

二人も意気揚々として準備に取り掛かった。

「てか展開早くね？」

それを言うな。b v 作者

翌日、李豊、楊弘以外の文官、武官が緊急召集された。

内容は『袁術が病で倒れた。もって後、数日の命。袁術は後継者を定める』と使者が伝え、自分の腹を満たす事しか考えない武官や文官達はウキウキしながら集まった。

だが、それが彼等の命取りとなった。

第二話 肅清

「袁術様。ご気分は如何ですか？」

文官の舒邵じょしょうが病のフリをしている美羽に尋ねる。

「うむ……周りが霞んでおる。どうやら妾はもう駄目なようじゃ」

「そんな事をおっしゃらないで下さい殿」

武将の梁綱りやうかうが美羽を励ます。

「いや、妾の事は妾が一番分かるのじゃ。だから死ぬ前に頼みがあるのじゃ」

「何ですか？何でもおっしゃって下さい」

「なら……全員死んでくれ」

『……はい？』

美羽の言葉に文官と武官の目が点になる。

「じゃからここにいる全員死んでくれと言うておるのじゃ」

美羽が寝たまま右手を上げるとバタンツ！と扉が開き、武装した兵士が出て来た。

「ーッ！！これはどういう事ですかッ！！」

舒邵が美羽に詰め寄る。

「てめえらの企みは全てばれてんだよ」

美羽の寝ているベッドの近くの柱から俺達が出た。

「舒邵以下文官、武官を全員粛清するのじゃッ！！」

美羽の言葉に兵士達が舒邵達に矢を向けて放った。

ヒュンヒュンヒュンッ！！

ドスッ！！ザシャッ！！グサッ！！

「ギヤアッ！！」

「ふげらッ！！」

「グヘエッ！！」

兵士から放たれる矢に武官、文官達が次々と力尽きていく。

「くそお……こうなれば袁術もろとも道連れだッ！！」

梁綱は隠し持っていた短剣を出して美羽に斬りつけようとした。

「美羽様ッ！！」

七乃と零が叫んだ。

「そうは問屋がおろすかいなッ!!」

俺は美羽が斬りつけられる刹那に美羽を庇う。

ザシュッ!!

「ちッ!!」

いてーな糞がッ!!

俺は美羽を七乃達に投げた。

「妾が飛んでる」

解説ご苦労さん。

「美羽様、大丈夫ですかッ!!」

「妾は大丈夫じゃ。しかし、長門が……」

「おのれ小僧がッ!!」

梁綱が短剣で俺に斬りかかる。

俺は何とか避けて、短剣を持つ手を斬った。

ザシュッ!!

「ぐッ!!」

「地獄に墜ちろやッ!! 散沙雨ッ!!」

隙が出来た梁綱に連続で突きを繰り出す。

「秋沙雨ッ!!」

梁綱に無数の突きを繰り出して斬り上げをする。

「これで最後やッ!! 風雷神剣ッ!!」

梁綱を風圧と共に貫いて雷撃を出したッ!!

「グアアアアアッ!!」

梁綱は叫び声と共にバラバラに肉体が散った。

「ふう……終わりやな」

俺は刀に付いてる血を拭き取る。

「長門アッ!!」

ドゴオオオンッ!!

「グエエッ!!」

美羽が俺にタックルをかました。(痛いし)

「長門、大丈夫かや？痛いところはないのか？」

美羽が大阪のおばちゃんのようにマシンガントークをかます。

「美羽、俺は大丈夫や。少し右腕が斬られたけどな」

二の腕が綺麗に斬られているが右腕が無くなるとかそういうのはない。

「ふむ、すぐに医師に見せたほうがよからう。誰か医師を呼んでこいッ！！」

零が俺の二の腕を見て、そう判断する。

「（ヒールとか使えばええねんけどまあええか）」

「とりあえずは反乱を抑える事が出来ましたが、当分の間、文官や武官の数が足りませんね」

七乃がハアと溜め息をついた。

「まあ俺も両方回るからガンバ」

「長門さんには感謝しきれませんね。この策も長門さんが考えましたしね」

無茶苦茶今さらやけど、この作戦を思いついたのは俺。

てかあんなに上手いくとは思わなかったけどな。f ^ | ^ ;

「何はともあれ長門のおかげなのじゃ。長門、妾は心から我が袁家に來た事を感謝するのじゃ」

美羽が頭を下げた。

むろん、零や七乃、兵士達もだ。

「こちらこそよろしくな美羽」

俺は美羽と握手した。

第二話 肅清（後書き）

とりあえず今日はここまでです。御意見や御感想等お待ちしております
す m (m

第三話 文官

「ん〜。よう寝たな」

俺は大きく背伸びをした。

昨日はようけあったわ。てか昨日は人殺したのによろ寝れたな。

「それにしても、ほんまに恋姫の世界やねんな……」

昨日会った美羽、七乃、零の三人。

「零は恋姫におらんかったけど、雰囲気は公蓋やな」

俺はそう言いつつ私服に着替える。

まあ右腕はまだ包帯巻いてるから着にくいけど……。

「おう美羽、七乃お早う」

食堂に向かう最中に美羽と七乃に出くわした。

「お早うなのじゃ長門」

「お早うございます長門さん」

恋姫の世界やと無茶苦茶悪い奴らやのにこの世界はいい奴らやな。

「今から朝メシか？」

「はい、長門さんも食べますか？」

「おう」

俺達は朝メシを食べた。

「今日は七乃達、文官を手伝うわ」

「なんじゃと？長門、儂のところ来い」

零が不満げに顔を膨らます。

……やべ…可愛ええ……。

「そうしたいけど、まだ腕も完治してないしな」

「むう、仕方ないのう」

零は諦めて薙刀を持って訓練所に行った。

「まずは、年貢の状況や。七乃、年貢の取り分はようになってるんや？」

「年貢を10としますと、五公五民としていますよ」

「……いやちやうやろな。多分、舒邵達が増税しと思うから調べてみ？」

七乃も頷き、部下に調べさせた。

一刻程で報告がきた。

「……八公二民で何て事をしていたんですかあの人はッ?!」

思わず七乃が机を叩いた。

「七乃は気づかんかったんか？」

「舒邵達が何かをしていたのは知っていましたが、美羽様を守るので精一杯でした……」

「まあそれはしゃーないな。とりあえず年貢の取り分は四公六民に変更やな」

北条早雲のパクリやね。詳しくはウィキで。

「五公五民ではなくていいんですか？」

「民の信頼を無くしたら国は滅びるからな」

「確かに」

七乃が頷く。

「食糧は有り余っとるやろ？食糧が苦しい農民に分け与えないとな」

「そうですね」

そうしてあれやこれやで溜まっている書類（でええんか？）が無くなっていく。

あ、そうや。

「七乃、屯田兵を作ろうや」

「屯田兵……ですか？聞いた事ない言葉ですけど……」

「まあそうやろな。俺の国が昔してたからな。屯田兵てのは普段は農民と同じように田畑を作り、戦時は兵士として働くというのや」

「成る程……いいですね」

間違ってたら作者まで言ってな。

「後は金銭面やけど、兵士の鎧は廃止やな」

「廃止て長門さん……（一・一；）」

「別に裸で戦えちゃうで？俺の国が昔に使用していた鎧を装備させるから。兵士の鎧見てたけど、あれは動きづらいからな」

「長門さんが言ってる鎧は機動力が重視ですか？」

「まあな、戦てのは時間との勝負でもあるからな」

これは俺の考えやけどな。

「もう夕方ですね」

「ああ……てか昼メシは？」

「……あ……」

七乃は顔を青くした。

俺との話して美羽を忘れていたようや。

「い、急いで行かないとッ！！もうすぐご飯ですので、食堂に来て下さいッ！！」

七乃は慌てて部屋を出て行った。

「……怒られるやろうな」。てか昼メシの場面は削除？」

めんどかったからb v作者。

「おいッ!! それでええんかいッ!!」

———食堂———

「……………」

「お嬢様〴〵。機嫌を治して下さい〴〵」

黙々と食事をする美羽を七乃が半泣きで謝っている。

美羽は何度か部屋に来たらしいのだが、気付かない俺達に怒って零と遊んでいたようや。

「ふんなのじゃ。七乃は妾より、長門というほうが楽しいようじゃのう」

「美羽様〴〵〴〵」

ごめん七乃。慰める言葉はないわ。

「全部長門さんのせいですよ〴〵」

「ちよいまでやッ!!」

とまあ恋姫の世界に来て二日目が終わった。

第三話 文官（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m
〔 m

第四話 武官

文官の仕事をしてたらいつの間にか一週間が過ぎた。

「長門はおるか？」

朝、食堂にメシを食いに行こうとしたら零が部屋に入ってきた。

「何や？」

「うむ、お主の腕も治ったようだしの。そろそろ武官の方に来てくれんかのう？」

まあ腕の方も完治したしな。

「ええよ。ほんならメシ食ってから行くわ」

「待つとるからな」

零が嬉しそうに部屋を出て行った。

「俺もちゃっちゃとするか」

俺は食堂でメシを食って、七乃に説明して訓練所に行った。

七乃が淋しそうにしてたのは内緒だ。（仕事が中々終わらないから）

―――訓練所―――

俺の目の前には大勢の兵士達がいた。

「……あの…零さん? ……これは?」

「丁度、千五百名の新兵じゃ。こいつらはお主の直率の部隊になるかの」

「……マジか」

「では、頼むぞ。儂は他の部隊も見ないといかんからのう」

「分かった。腹括るか……」

零が訓練所を出ると俺と兵士達が残った。

「俺が天城長門や、一応天の御遣いや（になってる）。これからお前ら鍛えるけど決して逃げるなよ?」

『はい』

「てめえらキン○マ付いてんのかッ!! もっと大きく声出せエエエッ!!」

『はいッ!!』

その後、俺は兵士達を徹底的に鍛えた。

主な内容は平突き、三位一体のフォーメーション等や。

平突きは新撰組から借りたけどな。

訓練が終わると兵士達はクタクタのようで一步も訓練所から出なかった。

「おお、派手にやったのう」

そこへ零が帰ってきた。

「零、訓練はどうやった？」

「お主が馬に付けた鞍という物は中々の坐り心地がいいわい。鎧とやらも馬から落ちずに済むのう」

鞍と鎧は三国志にはなかったはず（あったら言って下さい）なので長門が作ったのだ。

「ところで長門。暇なら農とやらんか？」

零が木で作った薙刀を俺に構える。

俺ははぁと溜め息を吐いて、木刀を兵士から借りた。

「……やりまっか…」

俺は呟くと左バッターが構える格好腰を低く落として右手をパーにしてから零に向け、親指と人差し指の間に木刀を入れた。

「……行くで」

ボソッと呟いて、俺は零に突進した。

「ウオオオオオッ!!」

「くッ!!」

零は何とか俺が繰り出した突きを腰を捻って避けた。

「甘いでッ!!」

俺は間髪入れずに横なぎの攻撃をする。

「ちいいッ!!」

零は薙刀で防御をする。

「…牙突を防ぐとはな…いやまだ俺の修行が足りんか…」

そう、いまの突きはるろ剣の剣心のライバルとも言える新撰組三番隊組長斎藤一が使っていた牙突である。

え? 何故牙突かて? そりゃあ、るろ剣の斎藤一が好きやから。

それはさておき、零は一旦俺と距離を保ちながら近づくチャンスを

伺ってたが、問答無用に今度はテイルズ技を放った。

「魔神剣ッ!!」

ゴオオッ!!

斬撃が零に襲い掛かるが薙刀で防御をする。

「貴様のそれは一発しか出ない事を知ってるぞッ!!」

零は一気に俺に突進する。

「魔神剣は一発しか無理だが、これならどうや? 魔神剣・双牙ッ!!」

ゴオオッ!!ゴオオッ!!

「何いッ!!」

突進してきた零は一撃目は何とか耐えたが二撃目は耐え切れずにそのまま吹き飛んだ。

「ガハアッ!!」

俺はそのまま倒れた零の首に木刀を構えた。

「まだするか零?」

「……いや、止めておこう。儂の完敗じゃ。よいしょ……イツッ」

零は立ち上がろうとした時、左胸を押さえた。

「どうした？」

「んゝ強く叩きつけられた衝撃で肋骨が折れたようじゃな」

零はジト目で俺を見る。

「……しゃあないな。キュア」

俺が呟くと、零は白い光りに包まれる。

光りが無くなると零は傷だらけのはず傷が無くなっていた。

「これで完了や」

「すまんな長門」

「何、気にする事はない」

思わず、笑顔でウツ〇ロウを真似たが気にしたら負けや。

「……そうか／＼／＼／＼／」

何か零の顔が赤いがまあええや。

「零殿ー！ーッ！ー！」

そこへ髪型がポニテで槍を持った女性が来た。

「どないした皐月？」

李豊——真名皐月。

美羽を前から支えていた一人である。

「ち、長門殿も一緒でしたか。実はここから南西約八里の村に盗賊が現れたとの事です。現在、村に駐屯していた部隊五百と、たまたま村にいた義勇軍五百の千名が防衛中です。盗賊の数は約二千とのことです」

「後半はええけど、初っ端の『ち』はなんやねん皐月？」

「さて、何のことでしょう？」

皐月はフッフと笑う。

皐月は何かと俺を嫌う。

まあ俺が皐月に会った時に「子供やな」と呟いたのが原因や。

だってなり、身長約145センチくらいで胸は………うん。

「まあそれは置いといて。今、出動出来る部隊は？」

俺は零に聞く。

「俺の部隊の大半は休暇中じゃから約五百じゃな」

「私の部隊も同じです」

「俺もやから約千五百か……。村の守備隊を入れると二千五百。何とかいけるな、ほならちやっちやと行くで」

「「おうッ!!（はいッ!!）」」

二人は頷き、半刻で準備は完了して急いで村に向かった。

第四話 武官（後書き）

戦闘シーンが呆気ない……orz

だんだんと頑張りますので。

御意見や御感想等お待ちしておりますm
〔
m

第五話 賊討伐（前書き）

戦闘シーンがあまりにも呆気ない。しかもご都合主義満載です。

第五話 賊討伐

「南西八里やな。てことはキロメートルに直すと約四キロやな」
進軍しながら呟く。

『里』は現代の中国を規準にしてるから文句は作者に言ってな。

それは酷いなb y作者。

「長門、何を一人で話しとるんじゃ？」

「何もないで」

零が俺に問い掛けるが気にしたらあかん。

「しかし零殿。作戦はどうします？」

皐月は零に問い掛ける。

「むう……」

零は唸るがいい案が浮かばへん様子や。

「今回はしゃーないわ。幸いにも騎馬隊が六百騎いるから、これを活かして騎馬隊を先に突撃させよう。騎馬隊が突撃して賊が混乱し

たら村の守備隊も多分打って出るやろう。そして最後に九百の歩兵で包囲して突撃。んで賊を殲滅やな」

「うむ、長門の案でいこう」

「長門殿にしてはいい案です」

「臯月くしてはとどういう意味や」

某埼玉の主婦必殺技でもあるこめかみに拳を臯月にグリグリする。

「イタッ！！痛いですッ！！」

臯月が暴れる。

「はぁ……。長門もその辺にしておけ。臯月も悪いぞ」

「うゝ……。」

臯月が半泣きしながら俺を睨んでくる。

「泣くなよ」

「泣いてないですよッ！！」

強がりも程々やで。

「分かった分かった。後で饅頭でも買ってやるから」

饅頭の言葉に臯月は明るくなる。

「約束ですよッ!!」

「はいはい」

「そろそろいいかの」

零が入ってくる。

「誰が騎馬隊率いるかの？」

「俺は馬乗って戦うんはあまり好きちゃうから零が指揮してな。俺は零の後ろに乗って行くから」

「ん？それはどういう事じゃ？」

「戦場についたら俺は降りて戦うから」

「むう、それは仕方ないの」

「うゝ……」

何故か零は顔を若干赤くしてるし、皐月は悔しそうな顔してる。何で？

「んじゃ行くか」

兵の一人に馬を渡して俺は零の後ろに乗る。

「全騎馬隊ッ!!これより敵賊の中に突入するッ!!抜刀ッ!!」

零の訓示が終わり、騎馬隊が抜刀をする。

「突撃 イイイーッ！！！」

『オオオオオオーッ！！！！』

騎馬隊が雄叫びを上げて突撃を開始した。

——村サイド——

「真桜。防壁の修理をどうだ？」

傷だらけの女性の言葉に上半身がビキニっぱいの着た女性に問う。

「うーん、南側のはもう無理やな。北はあと一回くらいでおじやんや。西と東はまだ持つわ」

「そう『オオオオオオーッ！！！！』！？何だッ！！！」

「風ちゃん、大変なの」

「風」

眼鏡をした女性と槍を持ち、ショートカットの女性が走ってきた。

「何があつた沙和ッ!! 雫ッ!!」

「援軍が来たみたいだ」

「そうなの」

「本当かッ!? よし、全軍で打って出ようッ!!」

傷だらけの女性の言葉に三人は頷く。

——長門サイド——

「ファイヤーボールッ!!」

火の玉が賊を襲う。

「ギャアアッ!!」

「月閃光ッ!!」

月の軌跡を描いて広範囲の賊を斬りつける。

「紅蓮剣ッ!!」

炎を上げて斬りあげ、回転斬りを出しながら獄炎弾を飛ばす。

「グワアアッ!!」

「あゝめんどいな」

斬りながら俺は呟く。

「賊の大將は何処だッ！！いざ一騎打ちを申すッ！！」

「俺が相手になってやるッ！！」

馬に乗った髭だらけの男が槍を持って突っ込んでくる。

「甘いわッ！！烈空斬ッ！！」

回転して敵将を斬った。

「か、頭がやられたぞーッ！！」

「に、逃げろッ！！」

「そうはいかないよッ！！」

皐月の歩兵隊九百が賊の周りを囲んでいた。

「全軍突撃イイーッ！！」

『ウオオオオオーッ！！』

九百名の歩兵隊が一斉に突撃する。

流石の賊も、これには敵わなく生き残りは降伏した。

「す、凄い……」

傷だらけの女性が呟いた。

――村――

「さあて、何で賊になったんや？」

俺は降伏した賊五百名に聞いていた。

「あんたらが増税するからだッ！！そのせいで元々の畑を追われたんだッ！！」

他の奴らも大体そうだった。

「零、今新しく開墾しようとしてる土地があったよな？」

「ああ、だがそこ高度が少し高くてはあまり作物が育たないと言われているぞ」

「かまへんかまへん」

俺は賊の生き残りに問う。

「お前らッ！！もう二度と賊に身を委ねないなら命を助けて、新しく土地を与えようッ！！」

「な、何だって？」

「本当かよ？」

賊達がざわめく。

「しかしッ！！その土地はあまり作物は育たないと言われているッ！！」

辺りがシンとなる。

「そこでお前らに五年の猶予を与えるッ！！五年の間の税はタダやッ！！だからその五年の間に税が取れるように開墾するんやッ！！むろん、お前らが必要な物資は俺達が提供するッ！！ただ、これは志願制や。行きたい奴だけ俺に言えッ！！」

『……………』

賊達は何も言わへん。やっぱ無理かな。

「……俺はやるぞッ！！」

「そうだッ！！この人は賊だった我々のために新しい仕事を提供してくれたんだッ！！引き受けない奴がおかしいッ！！」

「そうだッ！！」

「そうだッ！！」

……何かよかったみたいやな。

「臯月。こいつらは任したで」

「了解です。まあ長門殿にしては上出来ですね」

「にしてはてどういう事やねんッ!!」

俺と臯月が漫才をしてると四人の女性が来た。

「先程の演説聞かせて頂きました」

「ああ、恥ずかしいから忘れてな。てか誰なん？」

一応、問う。三人は知ってるけど後一人知らんし。

「これは失礼しました。私は楽進と言います。また私達四人で義勇軍を率いています」

「うちは李典や」

「沙和は于禁なの」

「あたしは王平だ」

王平？どっかで聞いたような……あッ!!牙門将やッ!!

横山光輝の三国志によく出てたな。（ちなみに作者は横山の王平が好きです）

この四人を美羽に仕えさせたいけどな。まあ無理やな。

「お前らが義勇軍を率いていたんか。村を救ってくれて感謝するで」
俺は頭を下げる。

四人は俺が頭を下げたのか動揺している。

「そ、そんな。頭を上げて下さい。たまたま我々が此処に流れ着いたので防衛しただけです」

「いや、それでもありがとうや。お礼やけど、義勇軍に必要な食糧や、武器は提供したるわ」

だが、俺の言葉に楽進は首を横に振る。

「それはもう必要ありません」

「何やて？」

「お願いですッ！！我々を貴方の配下に加えて下さいッ！！私は貴方の武に感動しましたッ！！」

「何イイイーーーーッ！！！！」

まさかの展開キターーーーーッ！！Σ（。Д。）

「駄目でしょうか？」

「いやいやいや。返事はいいよ。配下ええよ」

「やったでッ！！」

「やったなのッ!!」

「あたしの全てを貴方に捧げますッ!!」

王平、それプロポーズみたいやで。

「ありがとうございます。えと、貴方の名は？」

楽進が恥ずかしそうに聞く。

俺も忘れてたな。

「俺は天城長門や。他の奴らからは天の御使いと呼ばれてるけどな」

「貴方が天の御使いでしたかッ!? 私の真名は凧です」

「うちは真桜や」

「私は沙和なの」

「あたしは凧だ」

「凧は零だ」

「私は皐月です」

「俺は真名は無いから長門でええよ。てか長門が真名みたいなもんやし」

とりあえずの自己紹介は終わり、俺達は新たな四人の仲間を迎えた。

第五話 賊討伐（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m
〔 m

第六話 鬼の副長（前書き）

今回は作者の妄想が入っています。ストックが無くなったのでしばらく更新はありません。

第六話 鬼の副長

賊の討伐から三日が経った。

長門達は新たに風、真桜、沙和、雫といった武将を手に入れた。

「ふああゝ。ねむ……」

俺は目を擦りながら城の中を歩いてる。

「飯も今さっき食ったしな」

零と一緒に訓練するかと思い、曲がり角を曲がった時、何かにぶつかった。

ドスッ!!

「ゲエッ?!」

「いたッ!! 何じゃ長門じゃないかや」

ぶつかった物体は美羽だった。

「イタタ…。てか美羽、何してんの？」

「そ、そうじゃ。長門、助けてたもッ!!」

美羽が目をウルウルしながら俺にしがみつく。

……落ち着け俺の精神ッ!!

「御嬢様ッ!! 何処に行ったのですかッ!! 早く勉強の続きをしますよッ!!」

遠くの方で、七乃の叫び声が聞こえていた。

「なぐるほど。勉強が嫌やから逃げてたのか？」

「そうじゃ。七乃は厳し過ぎるのじゃ」

美羽が頬を膨らませる。

……何か癒されるのは気のせいかな？

タタタッ!!

走る音が聞こえたけど七乃やろな。

俺は辺りを見回すと、たまたま女性用の廁があった。

「美羽。そこに隠れてろ」

「分かったのじゃ」

パァッと美羽が廁に入った。

そこへ七乃が走ってきた。

「長門さん良いところにいました。御嬢様を見ませんでした?」

「ああ、さっきそこですれ違ったで。多分庭に行く途中やと思うけど、どないしたん?」

「御嬢様ったら私が目を離れた隙に部屋から逃げ出したんですよ。折角、勉強を教えたのに……」

ぶつぶつと文句を言う七乃。

「そら大変やな。はよ行かな逃げられるで」

「そうでした。長門さんありがとうございましたm () m御嬢様~~~~ッ!」

七乃は速度を上げて猛然と廊下を走って行った。

「……もうええで美羽。七乃は行ったみたいや」

「うむ……。しかし、長門は嘘をつくのが上手いのじゃ」

「美羽……それは褒めてるのかけなしてるのかどっちゃや?」

美羽の言葉に俺は少し頬をひきつく。

「ほ、褒めてるのじゃッ!」

美羽が慌てて訂正する。

……褒めてるなら何で慌てるんや？

「まあこれくらいで許しといたるわ。それより美羽、七乃はいないし街でも行くか？」

「行くのじゃ♪」

美羽は嬉しそうに俺に抱きつく。

「んじゃ行くか」

俺と美羽は門番に行って街に出た。

——城下街——

「さあいらっしやいッ！！安いよ安いよッ！！」

「ふわああ……」

美羽はあちこちに売られている品物を見とれていた。

まあ城の中によういたからな。

市場が新鮮やろな。

「饅頭はいらんかね」

お、ナイスタイミングや。

「おっちゃん、四つくれ」

「あいよッ!! 毎度ありッ!!」

「美羽、市場はどうや?」

「凄いの一言じゃ。活気溢れておるのじゃ」

「そうか。ほら饅頭や」

「ありがとうなのじゃ長門♪」

美羽が渡された饅頭をほうばる。

「うん、美味しいのじゃ」

美羽は笑顔や。ウンウン、子供は笑顔が1番や。

「食い逃げだーッ!!」

ん?

「待てえええーッ!!」

見たら、凧が食い逃げ犯らしき人物を追いかけている。

ちなみに凧達三人と義勇軍は街の警備隊に配属となった。

そして俺が警備隊の隊長。

ええんかな？

ちなみに俺は今日は非番や。

「どけえええーッッ！！」

おっと回想に浸ってたらいつの間にか食い逃げ犯がすぐ目の前に来てた。

「美羽は離れてろッ！！」

「分かったのじゃッ！！」

「ウオオオオオーッッ！！」

食い逃げ犯の男が短剣で俺に斬りかかる。

「オラアアアアーッッ！！」

俺は突き出した短剣を避け、相手の右腕を掴んで投げた。

無論一本背負いや。（多分）

「グアアアッ！！」

ドザアアアッ！！

男が地面に横たわる。

「た、隊長ッ?!」

追いかけてきた凧が俺を見て驚く。

「どうして此处に？」

「まあブラブラしに来てな。丁度出くわしたんや」

「そうでしたか。御協力ありがとうございます」

凧が食い逃げ犯を捕まえようとしたら、男が起き上がった。

「まだやる気か」

「うるせえええッ!!」

男は拾いあげた短剣で、凧に襲い掛かる。

俺が刀を抜こうとした時やった。

いつの間にか食い逃げ犯の後ろにいた女性が食い逃げ犯を一太刀に斬った。

「グアアアッ!!」

食い逃げ犯は今度こそ倒れた。

俺は女性を見ると絶句した。

女性はショートカットの髪型をしており、色は紫、服は袖口に山形の模様（ダンダラ模様）を白く染め抜いた浅葱色（薄い水色）の羽織を着ていた。

しかし、ダンダラ模様を白く染め抜いた浅葱色の羽織は歴史上、とある部隊が着ていた。

「……新撰組……」

俺は思わず呟いた。

そう、歴史上のとある部隊とは江戸末期に京都で活躍し、江戸幕府のために戦った部隊——新撰組やった。

女性は俺の呟いた言葉が聞こえていたのか俺に近寄る。

「……お主、この服が分かるのか？」

「ああ……新撰組やろ？近藤勇局長率いる部隊やろ？」

「その通りだ。しかし、此处は何処だ？私は確か函館にいたはずなのだが……」

俺は『函館』の言葉を聞いた。

「函館やて？まさか……あんた……」

「む？まだ名前を言ってなかったな。私の名前は土方歳三。元新撰組副長を勤めていた」

俺は思わず天を仰いだ。

「土方歳三キターーッ！！U（＾▽＾）U」

神様ありがとうッ！！

『知らん知らんby神様』

「すまんがここは何処だ？」

「三国志の時代の中国や」

「……………は？」

まあそらそうなるわな。

「説明するからちよいまで。風、食い逃げ犯を連行しといてや」

「了解です」

風達警備隊はそのまま現場を去り、群衆も事が終わると散って行く。

「美羽おいで」

「うむ」

下がっていた美羽が俺に近づく。

「とりあえずはどっかの店に入って話そうか？」

「うむ、異論はない」

土方も頷き、近くに店に入った。

〓〓〓説明中〓〓〓

「……成る程、三国志の世界か……。それで私は函館で死ぬのか？」

「記録によれば、腹部に銃弾を受け、即死だったらしいです」

「うむ、確かにあの時は銃声が聞こえたと思ったら倒れてたな」

土方は身に覚えがあるのか頷いている。

「しかし、袁術がこのような幼子とはな」

「むうゝ妾は幼子ではないのじゃッ!!」

美羽が頬を膨らます。

美羽……それをするだけで充分幼子です。

「土方副長はこれからどうしますか？」

「そうだな……袁術の……いや、貴様の部下になろう。お前は中々の武を持ってるしな。後で勝負しろ」

えゝ、拒否権無しっすか？

「おお、妾のところに来るのか？長門の警備隊の副長を任せると
や」

「これはかたじけないな」

アルエゝ美羽さゝん、俺の命が無くなりますよ（一・一；）

「それでは真名を預けよう。私の真名は樹梨だ。よろしくな」

「妾は美羽じゃ」

「俺は真名無いから長門でええよ」

こうして、俺達は新たに鬼の副長を仲間にした。

——オマケ——

「御嬢様。今まで何処にいたのですか？」

恐い……七乃が無茶恐いッ!!

「あう…その…あの……」

美羽も顔面蒼白や。

そして俺はゆっくりと戦略的撤退をしてる。(笑)

「……何処に行くんですか長門さん？」

ゾクッ!!

「……い、いやなに、二人の邪魔をしたらあかんしな。俺は外に出るわ」

俺は外に出ようとしたら、七乃に思いっきり肩を掴まれた。

「……風から報告がありましたよ。御嬢様と街にいたと」

風いいいーッ!!

後で覚えとけよおおーッ!!

「……ゆっくりとお話しをしましたか」

七乃の説教は翌日まで続けられた。

やっぱ、七乃を怒らせたら恐いな……。

ついでに風にはテイルズ技を少し教えた。

第六話 鬼の副長（後書き）

土方を恋姫＋無双に女性化したらこんなになりました。f ^
御意見や御感想等お待ちしていますm () m ^
;

第七話 賊討伐その二（前書き）

一話だけ出来たので投稿します。

今回も無茶苦茶ご都合主義です。

第七話 賊討伐その二

俺が城の廊下を歩いてると前方から真桜が走ってきた。

「真桜、廊下は走るな。先生に言うで」

「先生はおらへんから大丈夫です……ってちゃいますよッ!!」

ナイスツツコミ。

「どないした？」

「また、賊が出たみたいやねん。今度は山賊です」

「ほんまか？」

「はい、それでたまたま暇やったうちの部隊の中で、うち、雫、隊長、副長で出撃してくれと七乃さんが言うてました」

「山賊の数は？」

「報告によれば、約百名弱なんやけど……」

ん？真桜の端切れが悪いな。

「なんやけど？」

「その……襲われてるのは商人やねん。んで、山賊に襲われた全員が人売りやら何やらでかなり裏が多い商人ばかりやねん」

ということは……。

「山賊の奴らは義賊の可能性があるな……」

「それで悪徳っぽい商人達がうちに護衛を依頼してきてん」

「……上手くいけば悪徳商人を捕縛できるかもな。真桜、一個中隊を集めるんや」

「分かったでッ!!」

真桜が走っていく。だから走るなて。

ちなみに一個中隊の人数は三百名や。

俺の部隊はあれから三百名増えての千八百名もいる。

俺は軍隊みたいに隊を作り、二個中隊で一個大隊六百名を編制した。

ちなみに第一大隊の隊長は俺。

第二大隊は副長の樹梨。

第三大隊は真桜、凧、沙和の三人で部隊長をしている。

おっと、俺も準備をしないとな。

——1刻後——

「んで真桜。商人達が襲われる場所は？」

「此処から東北東にある内郷の山道や。南陽の商人達は洛陽に行く道として使ってるわ（地図帳を見て判断したので）」

ちなみに美羽は荊州の南陽大守になっている。

さらに、長沙太守には孫堅がいる。

この世界の孫堅はまだ生きていた。

恋姫やと早くに死んでるけどな。

「んじゃあ、ちゃっちゃと出発やッ！！総員進めえええーッ！！」

俺を先頭にして南陽の城を出る。

俺は馬に乗っている。

零に「馬くらい乗らんか」と言われて時間を見つけては乗り方を教えてもらい、何とか乗ることが出来た。

内郷には8刻程で到着した。

俺の部隊の兵士の鎧は全て、日本の戦国時代の鎧をわざわざ鍛冶屋で作ってもらっている。

このおかげで、機動力は上がった。(多分)

「これはこれは。天の御使い様が来てくださるとは有り難いことです」

脂で太った商人が俺に挨拶してくる。

「いやなに、民が困っているのだ。存分に力を貸そう」

「ありがとうございます」

商人はそう言うのと宿を取っていた宿屋に帰った。

「……あれが人売りの噂がある商人やな？」

「はいな。周辺からの聞き込みで間違いないです」

真桜が断言する。

「分かった。真桜、苦手や思うけど、あいつの荷物を確認するんや」

「けど、怪しがると思うで」

「山賊に取られんように荷物を確認したいとか理由付けんねん」

「成る程、その手があったな。流石隊長や。隊長も悪よのう」

「いえいえ真桜代官様こそ」

『ハハハハッ!!』

「……何をしてるんだこの二人は？」

部隊の指示を終えた樹梨が戻ってきた。

「いや、越後屋と御代官様の真似」

「そうそう」

「いや真桜は知らんだろ。それより長門。出発準備は出来たぞ」

「分かった、ほな行こうか。真桜頼んだで」

「任しときいや」

真桜は笑いながら、商人の方に行った。

「ほんじゃまあ、出発や」

三百名の中隊は商人達を守りながら出発した。

———山道———

「隊長。商人達が言うにはこちら辺で仲間の商人が山賊に襲われたらしいです」

俺は辺りを見回す。

山道というより、両方は険しい崖の下で逃げ場がない。

— —
俺ら
— —

多分こんな感じで、高さは十五メートルくらい。

その時、崖の上にあった木が揺れた。

「……………」

俺がその木を凝視しようとした時、何かの物体が飛んだ。

「敵急降下アアア直上オオオー——ッ！！」

真桜や樹梨、俺の部隊の奴らは上を見る。

石？ ちゃう。人やッ！！

五十人くらいの山賊が上から飛び降りて来たんや。

「ちッ！！商人達を守るんやッ！！」

俺の言葉に兵士達は商人達の周りを囲む。

「商人を狙えーッ！！」

「ヒヤッフーッ！！」

その間にも山賊達が降下してくる。

俺は地面を蹴る。

「臥竜閃ッ！！」

真空波が山賊達を襲う。

「グエッ！！」

「ギャピィッ！！」

「まだ終わらんでッ！！崩龍斬光剣ッ！！」

滑空しつつ、俺の前方にいる山賊を斬り抜く。

「真桜ッ！！樹梨ッ！！大丈夫かッ？！」

「大丈夫やッ！！」

「長門、私を誰だと思ってる？」

真桜と樹梨が笑いながら、山賊を斬っていく。真桜はドリル槍の螺せんそう旋槍やけど……。

「隊長ッ！！俺らも無事ですぜッ！！」

俺の部下の兵士も商人を守りつつ、山賊を斬る。

『ウオオオオーーッ！！』

「何やッ！！」

突然の叫び声に俺は近くにいた兵士に尋ねた。

「伝令ッ！！後方から山賊ですッ！！数は約百五十ッ！！」

さっきのは約五十人。今度は残りの奴らか。少し数が多いな。

「報告ッ！！奇襲部隊と思われる山賊約五十人は全員討ち取りましたッ！！」

兵士が走ってきて俺に報告する。

「よしッ！！今度は後方の山賊をやるでッ！！真桜ッ！！樹梨ッ！！行くでッ！！」

「はいなッ！！」

「うむ」

俺ら三人が部隊の後方に行くと二人の女性が山賊を指揮していた。

一人は槍を、もう一人は大金棒を持っていた。

「（あれって魏延やな？）」

大金棒を持っている女性はどう見ても真・恋姫＋無双の魏延にしか見えん。

「まあええや。真桜と樹梨は槍の奴を相手にするんや。捕らえろよ」

「了解や隊長」

「任せろ。すぐに加勢してやる」

ありがたいな樹梨。

さあて、やるか。

「俺は天城長門。お前は？」

「私は魏延。字は文長だ。^{あざな}人売りをする商人の命を頂戴するッ！！」

魏延は跳躍して鈍碎骨^{どんさいこつ}を俺に振り下ろす。

「ウオッ！！」

ドゴオオオンッ！！

地面が陥没してる。

「今度はこっちゃッ！！断空剣ッ！！」

振るった刀が竜巻が怒り魏延を上空に斬り上げる。

「ウグウッ！！」

「レイジングフレアッ！！」

俺は俺を中心にした炎の決界を張った。

そこへ重力の関係で落ちてきた魏延を再び、浮き上がらせた。

「グウウッ！！」

「これで最後やッ！！ブレイズビーストッ！！」

炎で作った獅子の闘気が魏延に襲い掛かる。

「グアアアッ！！」

魏延は地面に叩きつけられた。

「やば、死んだら困るって。キュアッ！！」

白い光りが魏延を包み込む。

光りが無くなると火傷や傷口が無くなっていた。

「魏延を縛れ」

兵士達が魏延を縛る。

樹梨と真桜も決着がついたのやろ。女性を縄で縛ってこっちに来た。

「命令通り縛ってきたぞ」

「ん。ご苦労や樹梨、真桜」

「お安い御用やで」

「んで真桜。見つけたか？」

真桜は俺に耳打ちをする。

「（馬車の一両におったわ）」

「分かった。商人を呼んでこい」

「ほいさ」

真桜が走り去る。

———天幕———

「それで御使い様。私に何の御用でしょうか？」

連れて来られた商人が俺に問う。

「しらばっくれるんなや。お前が人売りしてんのは遠の昔にばれてんねんやッ!!」

「なッ!!……しかし、証拠はあるのですか？」

商人は一瞬驚くが、はぐらかしてきた。

「真桜」

「おいで」

真桜に言われて天幕に入ってきたのは十人程の子どもやった。

「こいつが僕達をさらって売ろうとしていたんだ」

一人の少年が商人を睨む。

「こいつらが全て証明した。お前の悪事はここまでや」

「ひ……」

俺が商人を睨むと、商人は腰を抜かしてへなへたと倒れた。

「連れてけ」

兵士が商人を連れて天幕を出る。

「お前達はちゃんと家に帰したるから安心しいや」

俺が微笑むと子ども達は嬉しそうに喜んだ。

「さあ一休みしてきい」

真桜が子ども達を連れていく。

「魏延と……誰捕まえたんや？」

「周倉と言っていたな」

俺の言葉に樹梨が答えるって周倉やてッ！！

「ほんまか樹梨？」

「残念だが本当だ」

確か、周倉は山賊になっていたところに関羽が来て、関羽の部下になったけど……。 (実際は架空の人物らしい)

「まあええや。連れてきて」

「はい」

兵士が天幕を出た。

「魏延、周倉。民から聞くとお前達はただの山賊では無く、義賊だ

と聞くが真か？てか何で山賊になったんや？」

縛られた二人を目の前に俺が二人に問う。

「……確かに私達は悪徳な商人を狙う。理由は私達の住んでいた場所を商人から身に覚えのない借用書突き付けられて無理矢理取られたからだ」

周倉が口を開く。

周倉は髪はロングやけどポニーにしており、胸も巨乳に近い。

「それで復讐をするべく、商人達を片っ端からやっているんか？」

「その通りだ」

魏延が頷く。

「まあ気持ちは分かるわ。俺もそんななったら嫌やしな。んでさ、助ける代わりっちゃあなんやけど、俺らと一緒にこうへんか？」

「「はい？」」

二人が目点を点にする。

「言葉通りに袁術の部下にならへんか？勿論、お前らの家族も来たらいいし」

「けど、私らは今まで罪を繰り返してきたのだぞ？」

魏延が俺に問う。

「そんな商人が流した噂やて片付けたらええやん」

「……………」

二人は黙ってしまうが、5分くらい経つと二人は俺に最敬礼をした。
(手は縛られてるため臣下の礼が出来ないから)

「私達、喜んで」

「貴方様に仕えましょう」

顔を上げた二人は目から涙を流していた。

まあ処刑されると思ってからやろな。

「よし、今日から仲間や。俺は真名はないけど、長門が真名になる」

「私は土方歳三。真名は樹梨だ」

「うちは李典。真名は真桜や」

二人の縄を切った真桜と樹梨が真名を言う。

「私は魏延。真名は焰^{えん}耶^やだ」

「私は周倉。真名は涼だ」

二人も真名を交換する。

「んじゃ帰るか」

部隊は南陽に帰還した。

その後、拷問した商人の証言により多数の商人を捕縛。

家族や一族を農民に格下げし、犯罪をした人だけを処刑した。

第八話 警邏

焰耶と涼を仲間になって三日後、相変わらず南陽は平和やった。

「隊長。朝なの」

沙和が俺の扉の前で叫ぶ。

「ん。後一日」

「そしたら今日が終わってるのッ?!」

ナイスツツコミや。

「分かった。起きるわ」

俺はベッドから起きて、着替えをする。

ちなみに服は旧海軍の士官服や。

え? 何で士官服やて?

そら旧軍が好きやからや。わざわざ服屋で特注したんやからな。

いろんな意味で天の御遣いや。

まあ戦の時は新撰組の羽織りかな。

「んじゃ行くか」

部屋を出て、沙和と一緒に朝メシを食べた。

「んで、今日の警邏担当は？」

城の門前に集まった警備隊の隊員に聞く。

「今日は、土方副長以外の人です」

てことは凧達と一緒に。

「隊長ゝ。凧ちゃん達を連れてきたのゝ」

沙和達が走ってきた。

「んじゃあ警邏行くで」

——街——

「……………」

「（雰囲気重いな…………）」

原因は凧や。

殺気出しながら見回っている町人達が逃げてるし。

「凧」

「不審者でも見つけましたかッ!？」

ギランと眼がスポ魂みたいのになってるし。

「見つけてないわ。それより、凧。力を抜け。殺気出しまくって他の奴らが逃げてるで」

「えッ!？」

凧は周りを見ると、町人達の引き様に顔を赤くした。

「隊長、申し訳ありません」

凧が謝る。

「気にするなや。仕事に一生懸命なんや、そこら辺は皆分かるって。ただ、殺気があるから楽にな」

「はい」

その後も警邏をしたが、犯罪者はいなかったが代わりにこいつらがいた。

「御遣い様、遊ぼう」

「楽進様抱っこ、抱っこ」

そう子ども達や。

最近、子供とは言ったら書いたりしたらあかんらしい。

まあそれは置いて。

「隊長、どうしますか？」

そら決まっとるわ。

「遊ぶで」

——2時間後——

「御遣い様またね」

「楽進様また抱っこしてね」

子ども達は満足した様子で親達と一緒に帰った。

「……疲れたな……」

「……そうですね隊長……」

俺達は地面に横たわっていた。

あいつら、どんだけ元気やねん。

「……飯でも食うか」

「……はい」

俺達はヨロヨロとしながら近くにあった飯屋に入った。

「お姉さん、ラーメンと炒飯と餃子と、凧はどうする？」

「麻婆豆腐で」

「分かった。あと麻婆豆腐ね」

「アッハッハッ!! お姉さんとは嬉しいね御遣い様。青椒肉絲を付けといてあげるよ」

店のおばちゃんが大笑いして一品サービスしてくれた。

飯が来るまで凧と話すか。

「凧、俺が教えた技はどうや？」

「はい、一生懸命鍛練して腕を磨いています」

凧に教えたのはまだ二つやけど獅子戦吼と飛燕連脚を教えた。

「まあまた教えたるわ」

「ありがとうございます」

「あいよッ!! おまちどおさま」

飯が来た。

「食べようか」

「はい」

ふう、食った食った。

ラーメンは旨かった。炒飯も。

そういや、凧と青椒肉絲を半分にして食べてた時、顔真っ赤やったけど何でやろ？

てか麻婆豆腐にも唐辛子入れてたな。

「ほんまに辛い好きやな」

「癖ですね。気づいたら好きになっていました」

真顔で語るなよ。

ん？あれは……。

「真桜と沙和ちゃん。何してんのやあいつら？」

多分あれやろな。

「真桜、沙和。そこで何をしているッ!! お前達の警邏担当は東区だぞッ!!」

凧が叫ぶと、二人はビクッと驚いた顔をしてこっちに向く。

「ゲッ!? 隊長と凧やッ!？」

「やばいのッ!!」

二人が何やら言っているが生憎聞こえない。

まあ見つかったからどうしようか悩んでるんやろな。

「サボりか？」

俺が尋ねるが、二人は動揺しまくりや。

「サボりやないでッ!!」

「そ、そうなのッ!! 決して絡繰の部品や服を買いに行ったんじゃないのッ!!」

語るに落ちるって奴か？

「お前ら……」

凧が気を溜めてる。

……エネルギー充填120%（笑）

「ヤバッ！！」

二人が慌てて逃げるが……まあ無理やな。

「獅子戦吼オオオーッ！！」

ドカアアーンッ！！

「「うわあああああ（なの）ッ！！」」

二人が飛んでいく……たゞまや……違うか。

「骨は拾わんぞ」

雫、酷いな。

「長門」

樹梨がやって来た。

「どないした？」

「……黄巾の乱が勃発した……」

時代は未曾有の反乱を招くことになる。

第八話 警邏（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m
〔 m

第九話 黄巾の乱（前書き）

テイルズのモンスター出ます。勿論、ご都合主義です。

第九話 黄巾の乱

「それで状況はどうなん？」

玉座に集められた。

「黄巾賊が何処で発生したかは不明です」

俺の言葉に文官の雛菊（楊弘）が答える。

ちなみに雛菊は皐月と一緒に……うん。

本人が言うには「皐月より胸はあります」と発言してる。

「南陽辺りで黄巾賊はいる？」

「美羽様が糞共を粛清したおかげで、今のところはおりませんよ」

七乃が答える。

「むしろ、他方から救援が来そうじゃな」

美羽が呟く。

その時、兵士が入ってきた。

「申し上げますッ！！荆州の劉表殿からの使者が来ております」

「当たったな美羽」

「そのような。連れて参れ」

「ふむ、黄巾賊が荊州一体で暴虐をしているので援軍を出してほしいと」

「は。こちらはまだ兵の準備が整っておりません」

使者は言う。

「七乃。準備は出来ておるかの？」

「はい。六万五千名はいつでも行けますよ」

「うむ、使者殿。今言ったように六万五千名が派遣しよう」

「はは。ありがとうございます。それでは私はこれで」

使者は帰って行った。

「で、美羽。派遣の司令官はどうするん？」

「うーん、七乃はどうするかや？」

美羽は七乃に振る。

「そうですね。零さんは万が一がありますので此処に残ってもらいましょう。皐月や雫さん達に指揮官はまだ無理ですね。そうすると必然的に長門さんがいいでしょう」

ありゃ？俺かいな？

とまあそんなこんなで派遣部隊は決まった。

司令官俺。武将は凧、沙和、焰耶、雫の五人や。

派遣部隊は六万五千。

ちなみに美羽の全兵力は十五万。

流石袁家。

んで準備が終わると出発した。

「うゝん」

馬にばかばかと揺られながら俺は唸る。

「隊長どうしたの？」

唸る俺を見掛けた沙和が声をかけてくる。

「いやな、何か嫌な予感がすんねんな」

何やろな。胃がキリキリするみたいやな。まさか胃潰瘍か？

……んな訳ないか。

「まあ大丈夫やろ」

そしてまたぱかぱかと揺られ荊州へ向かう。

——荊州——

「とりあえず斥候を出すで」

皆が頷く。

斥候に選ばれた兵士達は辺りに散っていく。

それから一刻が過ぎた。

——天幕——

「帰って来ないの」

沙和が呟く。

「まあもう少し待とう」

雫が沙和を抑える。

さらに一刻が過ぎた。

「ほ、報告ッ!! 斥候が帰ってきましたが……」

報告に来た兵士の歯切れが悪い。

「どうした？」

「……戻って来た斥候はたった一人です。しかも、腹を獣に食い破れたような傷口です」

「何やてッ!!」

俺は思わず叫んだ。

「落ち着けお館」

焰耶が言う。

「とりあえず、負傷した兵士を見に行きましょう。すまんが、案内してくれ」

「御意。こちらです」

兵士が案内をする。

——野戦病室——

「おい、話せるか？」

斥候の兵士は酷い状態やった。

右手、左脇腹を食い破かれ、出血が激しかった。

「主殿の回復魔法とやらは無理ですか？」

「……あかん。此処までやられたらもう無理や」

よう見たら腸もやられとる。

「…た…たい…ちよう…」

死に際の兵士が俺に声をかける。

「何があったんや？」

「じ…自分は…斥候中…に…村を…見つけ…ました」

「村を？」

「そ…こで…は…獣…が殺戮…を…していま…した」

「……………」

「男…女…子ども…老人…さらに…黄巾…賊…までも…が…獣に…
食われて…いました…」

「……………」

「自分…は…何とか…脱出…するこ…とが…出来…ました…」

「……………そうか。よう頑張ったな」

「申し訳…ありま…せんが…家族…を…」

「分かった。お前の家族は不自由はさせん」

「あ…ありがとう…ござい…ま…す…」

兵士はそれっきり何も言わなかった。

『……………』

俺達は無言で兵士に敬礼をした。

「あの兵士が担当したのは確か北西やったな？」

「はい」

俺の問いに斥候隊の隊長が答える。

「……よし、全軍の出撃準備が整い次第、出撃する」

「隊長、本気なの？」

沙和が驚いたように言う。

「まあな。獣の正体によっては荊州から撤退しようと思う」

「しかし、黄巾賊が暴れているのに撤退したら美羽様の名誉に傷が付くと思いますが……」

凧の言う事は最もやな。

「そうやな……。とりあえず撤退は最後の手段や。皆も頭の中に入れといてな」

『御意ッ!!』

「報告ッ!! 全軍出撃準備完了しましたッ!!」

会議が終わった途端に準備が完了した伝令が来た。

「よし、行くか」

俺の言葉に皆が頷いた。

——壊滅した村——

「こりゃあ酷いな」

余りの惨劇に俺は顔をしかめた。

沙和に至っては顔面蒼白で身体が震えていた。

「沙和。大丈夫か？」

俺は沙和を落ち着かせるように後ろから抱く。

「あ……隊長。……ありがとうなの」

震えが収まったのか沙和は顔を真っ赤にしてる。

何で顔が真っ赤やねん。

「とりあえず、生存者がいないか探すんや」

兵士達は辺りを搜索する。

が、見つからなかった。

何処を見ても、身体の一部が無い死体。

女、子ども関係なくや。

しかも、黄巾賊の死体まで大量にあった。

——1刻後——

「隊長駄目です。生存者は何処にもいません」

凧が報告する。

「……そうか」

一旦、出直すかな？

「ほ、報告ッ！！」

一人の兵士が慌てて天幕に入ってきた。

「どないした？」

「け、獣ですッ！！」

「獣？」

「はい、斥候の兵を襲ったと思われる獣……狼や猪のような動物が

約五百が村の周りを囲んでいますッ!!」

「分かった。見に行くで」

俺は皆を連れて、天幕を出た。

「……嘘やろ？」

村の入口に着いた俺は愕然とした。

「主殿？」

雫は俺が呆然としたのを見逃さない。

「知っているのですか主殿？」

「ああ……、何で此処にいるねんッ!! シアンドギャルドッ!! レヴァントッ!!」

村を包囲する狼のモンスター『シアンドギャルド』とかのオベロン社秘密工場を守る怪物『レヴァント』に俺は力一杯叫んだ。

第九話 黄巾の乱（後書き）

ストックが切れたのでしばらくは投稿はありません。

御意見や御感想等お待ちしております m () m

第十話 戦闘（前書き）

お知らせです。

自分は大学生なので前期テストがあります。

なので八月中旬まで更新しないと思います。
（多分）

第十話 戦闘

——『シアンドギャルド』——

テイルズオブデスティニーでの登場。

オベロン社秘密工場内に放たれている警備モンスター。

——『レヴァント』——

テイルズオブデスティニーでの登場。

度重なる改造で誕生した、オベロン社秘密工場を守る怪物。

その二種類のモンスターが、俺の目の前にいた。

「……何でおんねんや……」

「どういう事だお館？」

焰耶が俺に聞いてくる。

「こいつらは、空想の世界で出てくる怪物やな」

「ほう、なら我々でも倒せますな」

雫がゆっくりと槍を構える。

他の皆も武器を構えている。

「やめろ。今のお前らやと無理や」

俺は今でも飛び出しそうな雫達を抑える。

「しかし主殿……」

「此処は俺と凧がやる。残りは弓矢で応戦。怪物が向かってきたら十人くらいで応戦や」

「……やむを得ないですな」

雫は悔しそうに顔をしかめる。

「雫。帰ったら技でも教えたるからそんな悲しそうな顔をすんなよ」

「……分かりました。楽しみしときます」

雫達は後方に下がる。

「……凧。準備はええか？」

「何時でも出来ていますよ隊長」

凧はモンスター達に構える。

「行くぞオオオッ!!」

「はいッ!!」

俺と凧はモンスター達に向かって走り出す。

『グオオオオンッ!!』

シアンドギャルドが吠えて俺達に襲い掛かる。

「蒼破刃ッ!!」

衝撃破が一匹のシアンドギャルドを葬る。

『グアアアッ!!』

十匹のシアンドギャルドがジャンプして空中から俺に襲い掛かる。

「レイジングフレアッ!!」

炎の結界を張り、シアンドギャルドの攻撃を封じる。

「ファイアフルフレアッ!!」

上空に作り出した火炎陣から六発の火炎弾が、密着していたシアンドギャルド群に降り注ぐ。

『グオオオオンッ!!』

命中したシアンドギャルドは次々と青白い光りを放ちながら消えていく。

「やっと三十くらいか。風は？」

「六匹目ですッ!!」

六匹目のレヴァントを飛燕連脚で倒した風が答える。

まだ大丈夫なようや。

「ちゃっちゃと終わらすでッ!!」

俺はそう言いながら、襲い掛かってきたシアンドギャルドを真つ二つにした。

「行くでッ!! エクスプロードッ!!」

圧縮した火球を生成して地面に着弾させる。

ドゴオオオオンッ!!

大爆発で大量のシアンドギャルドとレヴァントが葬った。

「す、凄いッ!!」

沙和が驚いてる。

『グアアアッ!!』

レヴァントが沙和に襲い掛かる。

「沙和ッ!!」

焰耶が鈍砕骨でフルスイングしてレヴァントを蹴散らす。

「え、焰耶ありがとうなの……」

いきなりだったので沙和啞然とするだけである。

「チ」

俺は沙和が襲われたのを見て、舌打ちをする。

「モンスター共め、生かしてはおけんでッ!! ウオオオオオッ!!」

俺はOVLを発動させる。

「行くでッ!! 全てを滅し、無に戻せッ!! シャイニング・バインドッ!!」

光りの波動が残っていたシアンドギャルドとレヴァントを襲う。

『グオオオオンッ!!!!』

全弾命中した二種類のモンスターは青白い光りを放ちながら消えて

いった。

「はあく疲れた」

俺は溜め息を吐いて、地面に座る。

「隊長お疲れなの」

沙和が近寄ってくる。

「雫、被害は？」

「死傷者は、約百弱だ。主殿と風が戦ってくれたおかげで少ない被害ですんだ」

「そうか。何とかなったな。しかし、まさかテイルズのモンスターが出てくるとは思わなかったな」

「お館。これからどうするんだ？」

焰耶が聞いてくる。

「本当やったら今すぐにでも撤退をしたいけど、まだ荊州一体には黄巾賊がいるしな。それに撤退したら美羽の名が傷つく」

「……では？」

「……しばらくは荊州に居よう。それと、いつまたモンスターが出るか分からん。そこで、沙和、焰耶、雫。お前らに風と同様に技を教える」

俺は決意する。

あんなんが出なかったらテイルズの技をこいつらに教える事なんてなかった。

まさか左滋とかの仕業か？

「まあええや。みっちり鍛えたるから覚悟しいや」

ニカツと笑ったる。

「任しといてなのッ!!」

「よろしくお願いします。主殿」

「お手柔らかにな、お館」

三人は嬉しそうに笑う。

「ついでに尻も鍛え直しな」

「えッ!? Σ（。Д。）」

「当たり前やろ。もう少し倒せよ」

「うゝ（隊長の修行はきついですが……）」

何か、尻がぶつぶつ言ってるけど無視やな。

そして、雫達の技の修行？が始まる。

第十話 戦闘（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m
〔 m

第十一話 孫家（前書き）

今日は、広島の前爆投下から65年目です。

歴史に興味がない人もいますが、過去に我が国で何が起きたかくらいは分かります。

大和を『だいわ』と読む馬鹿野郎がいるけど、普通判るやろ。

第十一話 孫家

「……し…死ぬ…なの……」

沙和が倒れている雫達の思った言葉を読み取ったんやろな。

あれから三日発った。

荊州の黄巾賊はあらかた鎮圧した。（多分）

けど、テイルズのモンスターは出て来なかった。

な〜ぜ〜？（某テレビ番組）

まあ、出て来なかったらラッキーやから、雫達にテイルズの技を教えまくった。

沙和は双剣やから双剣士の技。

雫は槍やからユージーンみたいに槍戦士の技。

焰耶は多分大剣士やと思うから大剣士の技を教えた。

作者はマイソロ2で考えてるからな。

焰耶はこれじゃね？と思ったら言っして下さい。

「天城司令官ッ！！」

兵士が駆け寄ってきた。

「どないした？」

「ハ、南方より砂埃が来ます」

「ん？敵か？」

俺達は南方の方角を見ると確かに砂埃が出ている。

「報告ッ！！砂埃の正体は部隊のようです」

新しい兵士が報告する。

「部隊やて？旗は？」

「『孫』と書いています」

『孫』で有名な旗は孫呉しかない。

「てことは孫堅か？」

俺らがそんな話を話してるというの間にか孫堅の部隊は止まったり、一人の女性がこっちに向かってきた。

「俺は長沙太守の孫堅で字は文台だッ！！部隊長と話がしたいッ

「!!」

真・恋姫の孫策を少し大人っぽくした孫堅やった。

「俺が袁術軍派遣司令官の天城長門や」

俺も孫堅に近づく。

「貴様が、天の御遣いと呼ばれる奴か……。中々の面構えだな」

「そりゃあどうも」

俺は孫堅に会釈する。

「んで、いきなりの訪問で何か御用ですか？」

「うむ、ちと相談があつてな」

「分かった。詳しい事情は天幕で聞くわ」

俺は孫堅を天幕に案内する。

——天幕——

「それで、どないしたんや？」

「実はな……………」

孫堅の話はこうやった。

俺ら袁術軍と孫堅軍が黄巾賊を倒しまくったが、敗存兵らが荊門を無傷占領したのだ。

幸いにも、荊門にいた民は直前で気づいて避難したらしい。

「よーするに荊門の賊をやるから一緒にしようやと……」

「その通りだ」

孫堅が頷く。

「ま、断る理由もないし、ええよ」

「かたじけないな」

「んじゃちゃっちゃと行くか」

俺達は陣を片付けると、荊門に向かった。

——荊門郊外——

「むちゃ多ッ!!」

思わず叫んだじえい。

旗有りすぎや。

「黄巾賊の数は？」

「斥候の報告によりますと、約三万です」

雫が報告する。

「こっちは袁術軍六万四千。孫堅軍は三万か……。御館、力づくで正面からぶつかりますか？」

焰耶が俺に聞いてくる。

「いや、無駄に戦力を消費したくないしなく。何か策でも練るか」

皆が頷く。

「とりあえず、黄巾賊の陣の周りを探ろうか。風、悪いけどもう一回、斥候を放ってくれ」

「分かりました」

風は頷いて、また斥候が放たれた。

——1刻後——

「隊長。斥候の報告によりますと、黄巾賊の後方に山があります。そこには全く警戒していないようです」

「警戒部隊がないんか？」

「はい」

凧が頷く。

「……なら、そこを突くか」

「御館、突くとは？」

俺の意味に分からない焰耶が問う。

「隊を二つに分ける。山から奇襲を行う部隊は七千。残りは正面から当たるんや」

「分かりました。しかし、奇襲部隊は誰が隊長を……やっぱ隊長がしますね」

「凧、心の中読むなよ……」

まあそれでも行くけどな。

「孫堅にも伝えへんとな。悪いけど、伝令頼むわ」

「分かりました」

天幕の外にいた兵士が小走りで行く。

一刻後、孫堅からの奇襲部隊が来た。

「て、やっぱ孫堅もいるんや」

「当たり前だ。正面は黄蓋と周瑜に当たらせている」

「母様。部隊の準備、整ったわよ」

後方から一人の女性が来た。

勿論、孫策や。

「あら、貴方が天の御遣いね。……ふん」

孫策がジロジロと俺を見る。

てか貴女の胸やばいっす。

勿論、孫堅もやけど。

「隊長……」

風が睨んでくる。

とまあそれはさておき、俺達奇襲部隊七千は夜の闇に隠れて、黄巾賊の陣の後方に行って、時が来るまで息を潜めた。

第十一話 孫家（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております。
m
〔
m

第十二話 突撃（前書き）

今日は終戦記念日です。

今の若者達はあの日、何があったのか今だに理解してません。

「戦争で負けたんやろ？」

そんな風に片付けるのはクズ以下です。

歴史に興味を持って下さい。

何のために多くの人達が戦死したのか？

管の野郎、靖国神社参拝しろや。

第十二話 突撃

「……朝はまだか？」

俺は少しブチ切れしそうや。

理由？理由はな、黄巾賊の奴ら宴会しとんねん。

グゥキュルキュル。

「……腹減ったな……」

「我慢して下さいよ隊長。皆、我慢してるんです」

分かってるよ。分かってるねんけど、腹は減るねんッ！！

「ブルアアア……黄巾賊の奴らは皆殺しや……」

何故かバルバドス（笑）

「さあて、行くか」

焰耶が鈍砕骨で素振りをする。

「焰耶。この作戦の意味分かるなの？」

沙和が焰耶に聞く。

「私らが、暴れ回って奇襲部隊から気を逸らすんだろ？」

「……焰耶がまともな事を言ってるのッ！！明日は天気は雪なのッ！！」

「ちょっと待て沙和ッ！！それはどういう意味だアアアッ！！」

と、いつも賑やかな袁術軍である。

その様子を黄蓋と周瑜が見ていた。

「賑やかじゃのう」

「まあ緊張のほぐしでしょう。祭殿、準備は？」

「心配いらん。既に完了しておる」

黄蓋がニヤリッと笑う。

「分かりました。なら、突撃の銅鑼を鳴らしましょう」

ジャーンッ！！ジャーンッ！！

そして、戦は始まった。

——奇襲部隊——

ジャーンッ！！ジャーンッ！！

「……始まったみたいやな」

突撃の銅鑼と共に、孫堅軍と袁術軍の部隊が突撃を開始する。

『ウワアアアアアッ！！！！』

荊門にいた黄巾賊も、打って出るようや。

両軍が入り乱れる乱戦になった。

「奴らはこの世の毒だッ！！一兵たりとも逃すなッ！！」

焰耶は鈍砕骨を振り回す。

鈍砕骨に命中した黄巾賊の頭から脳や、骨が飛び出す。

「突撃——なのッ!!」

沙和も焰耶同様に、黄巾賊に斬りかかる。

「ほう……。袁術軍も中々やるようじゃな」

「それに士気もかなり高いです」

黄蓋と周瑜が呟く。

「じゃが、黄巾賊に袁術軍だけではないと思い知らせようか」

「御意ッ!!」

「孫堅軍の底力を見せろッ!! 突撃イイイ——ッ!!」

『ウワアアアアアッ!!!!』

——奇襲部隊——

「そろそろやな」

俺が呟く。

両軍の主力が、荊門の郊外で激突しとるはずや。

「行くか？」

孫堅が俺に問う。

俺は無言で頷き、刀を抜いて天に向けた。

「……狙うは敵の大将の首のただ一つやッ！！命を惜しむな、全軍突撃やアアアーッ！！！」

『ウワアアアアアアッ！！！！』

俺達、奇襲部隊は敵の退路を断つために荊門に突撃した。

この時、荊門には敵将率いる精鋭がいた。

けど、問題は敵将やった。

———???

「將軍ッ！！後方の山から、敵の別部隊が接近していますッ！！」

部下からの報告に敵将黄祖が舌打ちをする。

「ちいッ！！奴らまだ、戦力を隠していたなッ！！全員物陰に隠れろッ！！」

黄祖の部隊四千名は慌てて家屋等に隠れた。

——奇襲部隊——

「ん？やけに静かな。少数の守備隊くらいはいるやろに……」

俺が呟く。

「報告ッ！！敵将の旗を発見ッ！！【黄】ですッ！！」

「ッ！！黄祖かッ！！」

何で黄祖が黄巾賊におんねんッ！！

正史での孫堅は黄祖の部下呂公に射殺された。

演戲やったら石で押し潰されたっけ？

んなもん、今はどうでもええわ。

孫堅に注意を言おうと振り返った時、たまたま孫堅の近くにあった家屋から一人の男（恐らく黄祖）が孫堅に向かって斬りかかろうとしていた。

「孫堅ーーーーッ！！！」

俺は無意識に走り、孫堅を突き飛ばした。

その瞬間、グサツと腹を刺された。

——孫堅SIDE——

どうやら敵の守備隊はいないようだな。

その時、天城の兵士が敵将の旗を報告しにきた。

「報告ッ！！敵将の旗を発見ッ！！【黄】ですッ！！」

黄祖か……。

奴は劉表の部下のはず。

ならば、裏切りか。

「孫堅ーーーーッ！！！」

俺を呼ぶ叫び声に気づいた。

天城だった。

天城はいきなり俺を突き飛ばした。

ちょ、ちよとまてッ!! Σ (▽ ;)

俺は天城に文句を言おうと天城を見ると、奴は左脇腹を刺されていた。

——孫堅SIDE終了——

——孫策SIDE——

荊門に、守備隊はいないようね。

でも、気を抜いたらやられるからね。これは母様の受け売りよ。

その時、天城の兵士が敵将の旗を報告しにきた。

「報告ッ!! 敵将の旗を発見ッ!! 【黄】ですッ!!」

てことは、敵将は黄祖ね。

劉表の部下らしいけど、裏切ったのね。

「孫堅——ッ!!!」

すると、天城が母様に向かって走り、母様を突き飛ばした。

天城に文句でも言おうとした瞬間、天城は左脇腹を刺された。

———孫策SIDE終了———

第十二話 突撃（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m
〔 m

第十三話 負傷、そして終了（前書き）

短いです。そして最後は無理矢理です。

第十三話 負傷、そして終了

「…………ガフッ!!」

黄祖の糞野郎に左脇腹をやられた。

「…………つう。ウラアアッ!!」

何とか痛いのを我慢して黄祖の左腕を斬り落とした。

「グハアッ!!…………こんなところで死んでたまるかッ!!やれえッ
!!」

黄祖の言葉に部下達が、俺と孫堅に大量に矢を浴びさせた。

ザシュッ!!ザシュッ!!

「グウッ!!」

咄嗟に孫堅を庇ったが、二本受けた。

「隊長ッ!?!隊長によくも…………獅子戦吼ッ!!」

風が弓兵を吹き飛ばす。

「クッ……キュアッ!!」

俺は激痛に堪えて、回復晶術のキュアを使う。

「ようやくくれたなあ黄祖オオッ!!!!くらえッ!!!殺劇舞荒剣ッ!!!」

デステイニーのスタンが使うブラストキャリバーの『殺劇舞荒剣』を黄祖に叩き込んだ。

「ギャアアアアアアッ!!!!」

黄祖の身体はバラバラに斬られた。

「黄巾賊の敵将黄祖ッ!!!袁術軍客将である天の御遣い天城長門が討ち取ったりイイイーッ!!!!」

俺は刀を天に向けて、戦場に響き渡るように叫んだ。

「頭がやられただど?」

「もう勝ち目がねえ、逃げろッ!!!」

指揮官を失った黄巾賊達は慌てて四方に逃げ出す。

「奴らはこの世の屑だッ!!!一人たりとも逃すなアッ!!!騎馬隊は逃げ出す黄巾賊の退路を断てッ!!!弓部隊を攻撃の主力にしてジワジワと追い詰めるんやッ!!!歩兵は弓部隊の攻撃で負傷した黄巾賊の息の音を止めるんやッ!!!」

賊は確実に止めを刺さないとまた復活するしな。

「天城、傷は大丈夫か？」

「さっき使ったのて何？妖術の一種？」

孫堅と孫策が傷の心配と、さっきな技を聞いてくる。

「傷は大方大丈夫や。さっきのはうまあ妖術の一種みたいなもんやな」

「そうか、なら安心だな。俺達も黄巾賊の殲滅に掛かろう。雪蓮行くぞ」

「分かったわ母様」

二人は軍を率いて突撃していく。

「孫堅達に任せてばかりいられるか。俺達も突撃するでッ!!」

『オオッ!!』

「行くぞオッ!!」

俺は愛馬に鞭を入れて、黄巾賊に向かって突撃する。

三万の黄巾賊を殲滅するのに約5時間かった。

——荊門——

荊門郊外で黄巾賊を討ち取った俺達は荊門に入城し、念のために敗存兵がいないか一軒、一軒見回った。

てか孫堅達がないし。

ん？正面から孫堅達がきよった。

何か、孫堅と孫策の顔が若干赤いな。

「……はぁ……はぁ……長門……」

「……くう……」

……逃げよう。

ガシッ！！

「……もう……我慢出来ない……」

「……母様……私も……」

「……死亡フラグか？」

俺はズルズルと二人に連れられて小屋に入った。

「……すまない天城殿」

「…生きてたら酒を飲もう」

黄蓋と周瑜は俺に黙祷をした。

せめての罪滅ぼしなんかは知らんが小屋から、三百メートル以内は近づくなと命じた。

この日、俺は二人の女性に食われた。（笑）

最初はあの人と決めてたけど……しゃあないな。

……しばらく腰が痛かったのは秘密や。

第十三話 負傷、そして終了（後書き）

御意見や御感想等お待ちしておりますm
〔
m

第十四話 洛陽と護衛（前書き）

確か何進は肉屋の店主やったはず……この頃で旧曆を使っていなかったか？

一応、この小説は三国志演技も入っています。

第十四話 洛陽と護衛

荊州から帰ると、黄巾の乱は終わっていた。

話しによる曹操が張角三兄弟を討ち取ったらしい。

……絶対にあの三姉妹やろなく。

んで、美羽達は洛陽の朝廷に呼ばれた。

理由は黄巾賊の恩賞を支払うとの事や。

とりあえず、美羽を護衛する武将として、俺、七乃、零、焰耶、涼の五人や。

一万六千の兵力で美羽を護衛の元、一路洛陽に向かった。

——洛陽——

「南陽とはかなり違うな」

「そりゃあ、洛陽は皇帝がいるからな。活気も違うわい」

俺の呟きを零が答える。

「しかし、美羽が何進と知り合いやったとは知らなかったな」

「時雨殿はまだ、肉屋の店主だった頃によく美羽様が遊びにいらしていたのじゃ」

恋姫の世界でもやっぱ肉屋の店主なんやな。

そして、宮殿ぽいに入った。

——謁見部屋——

「美羽、久しぶりだな」

「時雨殿も相変わらず元気そうで何よりなのじゃ」

謁見部屋で待っていたら、一人の女性が入ってきた。

美羽はその女性に駆け寄って抱き着く。

「時雨殿、狙われたおるぬか？」

「うむ、今朝も刺客が二人もきおった。恐らく十常侍の手先だろう」

何進が顔を曇らす。

そしたら俺と視線があった。

「ん？ 貴様は？」

「天の御遣いの天城長門なのじゃ。妾のところで客将をしておるのじゃ」

美羽が何進に説明する。

「そうか、貴様か。大將軍として心から礼を言う」

何進が頭を下げる。

「あんま大した活躍はしとらんけどな……」

俺は苦笑する。

「時雨殿。妾らが洛陽にいる間は出来る限りの護衛をしますのじゃ」

「すまないな美羽」

美羽の言葉に何進が謝る。

「お世話になった御礼ですのじゃ」

こうして洛陽に滞在の間は何進を護衛することになった。

——朝食——

「一応は、毒味しとるがの……」

何進が弱々しく答える。

「どれどれ……」

ひよいと青椒肉絲を口に入れる。

「ムグッ!!ぐぬぬぬ……」

「ど、毒なのかやッ?!」

「長門ッ!!しっかりせいッ!!」

周りが慌てる。

「……んまいなこれ」

『……違うんかいッ!!!Σ（。Д。）』

何故かのツツコミ。

……ナイスやな。

——昼食——

「……もうしいひんから許してや」

その後、皆にぼこられて昼食抜きにされ、す巻きにされた。

「知らないのじゃ」

「自業自得ですね」

「阿呆じゃのう……」

大阪人はボケなあかんねん……。

——夕食——

「この肉マジうめえな」

「確か猿の肉だったような……」

「ブー——ッ!! Σ（。Д。）」

「わ、汚ッ!!」

……そして……。

「あれ？何進は？」

朝、起きると何進がいなかった。

「ああ、さっき宮中に呼ばれたぞ」

零が答える。

そうか。しかし今日も暑いな……今、何て言った？

「宮中に呼ばれたんか？」

「そうだが」

「今日は何日や？」

「確か8月29日だ」

……やばいッ!!

「零ッ!! 急いで全兵を出撃するんやッ!! 何進が暗殺されるッ!!」

「なッ!!? 分かったッ!!」

零は慌てて兵に伝えに行く。

俺は、刀を取り、新撰組の羽織りを着て用意された馬に乗り込んで
単身で宮中に向かう。

「間に合えばええんやけど……」

第十四話 洛陽と護衛（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております
m
〔
m

第十五話 何進暗殺？

——宮中の門——

宮中の門らしき建物に近づく和金に物を言わせたような鎧を着た金髪ドリルの女性とその護衛がいた。

「あら？ 貴方は誰ですか？」

「袁術の所で世話になっている天城長門や。お前は？」

「美羽さんの所ですか？ とすると、貴方は天の御遣いですわね。私は名門袁家の娘、名は袁紹、字は本初ですわ。美羽さんとは異母姉妹ですわ、オーホッホッホッ！！」

……やっぱ恋姫の袁紹やな。

「時雨さんを護衛しにきたのに時雨さんだけを呼ぶ十常侍は何を考えているんでしょう？」

「そうやッ！！ 何進は何時宮中に入った？」

「今さっきですわ」

『キャアアアアアアッ！！』

その時、何進の悲鳴が聞こえた。

「この悲鳴は時雨さんッ!!」

「門をぶち破るでッ!! タイダルウェーブッ!!」

ゴゴゴゴッ!!

ドガアアアーンッ!!

巨大な津波が鉄製の門を破壊する。

『なッ!?!』

袁紹と護衛達は驚いている。

「何進ーーーーッ!!」

破壊された門を乗り越え、殺された護衛兵と今まさに十常侍の兵士達に犯されかけた何進がいた。

何進の片胸は開け、銀色のポニテはぐちゃぐちゃになっている。

「き、貴様何奴だッ!!」

その奥にいた十常侍達が突然の乱入に驚いている。

「天の御遣いの天城長門ッ!! 十常侍ッ!! 貴様らに正義の鉄槌を食らわすでッ!! ファイヤールッ!!」

とりあえず、何進に集まっている敵兵を排除する。

「ぶげらッ!!」

「ぐえッ!!」

「何進大丈夫か？」

「あ、ああ。何とかな」

「とりあえず上羽織ってな。鼻血出そうや」

「ッ!?! 見るなッ!!」

は、腹に一撃は痛いわ……。

「と、とりあえず十常侍は排除するで」

「ああ、思う存分やれ」

「皆さんやーってしまいなさいッ!!」

『アラホラサッサーッ!!』

……ドロ○ジヨ?

いつの間にか復活した袁紹が攻撃を下す。

「ちッ!!」

私兵が戦う中、逃げようとする十常侍。

「させるかッ!!」

俺は近くにあった弓と矢を拾って構える。

「雹雨ッ!!」

八本の矢を上空に発射して矢が降下して十常侍を襲う。

『ぐわあああああッ!!』

八人が矢で討たれる。

残りの二人は仲間を見捨てて逃げる。

「逃すかッ!! 豪烈ッ!!」

力を溜めて逃げる二人に矢を放つ。

「グフウッ!!」

「ゲピュッ!!」

矢が二人の背中に刺さる。

「捕らえなさいッ!!」

袁紹がすぐさま部下に命じて捕獲する。

「ありがたいな袁紹」

「私は自分の仕事をしたまでですわオーホッホッホッ!!」

……袁紹てこんなキャラやったか?

「何事ですかッ!？」

ん?

「何后様ッ!!」

派手な服を着た姉ちゃんが現れた。

てか何進の妹かいな。

「姉さん。十常侍を捕らえてどうするつもりですか？」

「何進大將軍は後少しで十常侍に殺されそうになったのです」

袁紹が何后に説明する。

「何ですってッ!?!……今まで十常侍は保護してきましたが、姉さんが殺されるのは黙ってはいません。袁紹殿、煮るなり焼くなりして下さい」

そらそうやな。

「そんなッ!?!何后様ッ!?!」

生き残っている十常侍が兵士に引きずられていく。

「姉さん、申し訳ありません。私はよかれと思っていたのが裏目に
出たようです」

何后が何進に謝る。

「いや、構わん。儂もお前に説明する事が出来んかった」

「仲直り出来てよかったな」

「……喧嘩はしてないですわよ」

袁紹がまさかのツッコミッ!! Σ（。Д。）

「まさかのはどういう事ですのッ!？」

うっさいな。

「天城。助けてくれてありがとう。麗羽もすまない」

何進が礼を言う。

まあとりあえずは暗殺が無くてよかったわ。

「儂は洛陽を去ろう。このままではまた暗殺されるかもしれん。天
城、美羽のところで世話になろうと思う」

……何すかこの展開は？

「儂の後任には涼州の董卓に任せる。あの子に任したら大丈夫だ」

……もうツツコミを入れへんで。

「とりあえず何進は死んだ事にするけど、どうする？」

「ふむ……天城。貴様が決めてくれ。お前に命を助けられたからな」

……マジ？

「んじゃあ……姓は源、名は頼朝でいこうか」

ぶっっちゃけ源頼朝や。

まあ誰も気付かんし大丈夫やろ。

だが、後に源氏の先祖になるとは今のところ俺も知らなかった。

第十五話 何進暗殺？（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m
〔 m

第十六話 到着と告白（前書き）

何でやろ？何かよく分からんようになった……O r Z

第十六話 到着と告白

何進が暗殺された事は中国内に響き渡った。

二週間後、何進の代わりに涼州の大守董卓が洛陽に着いた。

——玉座——

「涼州大守、姓は董卓、字は仲穎。ちゅうえい陛下の要請を受け、只今到着致しました」

董卓が皇帝劉協に臣下の礼をする。

「董卓。よくぞ、参った。長旅で疲れたであろう。今日はゆつくりと休んでくれ」

幼い少女の劉協は立派に皇帝の役目をしていた。

何進暗殺事件の後、何后と劉弁にも暗殺の手が来るからもしれないと判断した何進——源頼朝は二人も死んだ事にして、南陽に行く事になった。

流石に美羽と七乃は腰を抜かしたけど……あきらめや。

袁紹にも黙っておくようにと言っておいた。

「そんなの当たり前ですわオーホッホッホッ!!」

そう言いながら自身の領土に帰る袁紹やった。

顔良と文醜は苦勞しそうやな……。

玉座では董卓と賈クが劉協に到着の挨拶をしている。

「……『あの人』は何処や？」

とりあえず、俺の嫁でも探すか。

あ、おった。

焰耶と涼と訓練してたし。

よう見たら呂布と陳宮と張遼もいた。

「お、あんたが天の御遣いやな？」

張遼が酒を飲みながら訓練所の入口にいた俺を見て近寄ってくる。

「まあそう呼ばれてるわ」

「ほう、貴様か」

そこへ、焰耶と涼の訓練を終えた俺の嫁——華雄がいた。

「天の御遣いもかなりの武を持っていると聞く。私の名は華雄だ。私と一戦やらないか？」

今、焰耶達としてたやん。

とりあえず、華雄に言いたい事あるし。

「華雄ッ！！生まれる前から好きでしたッ！！俺の嫁になって下さいッ！！てかなれッ！！」

『……………ええええええええーッ！！！！Σ（。Д。）』

流石に全員が驚いた。

ちなみに当の本人の華雄はというと。

「……………／／／／／」

口をパクパクしながら顔を真っ赤にした。

可愛いな。

「アッハッハッハッハッハッ！！！！あんたいきなりかいな。よう言えるなあ」

張遼が大爆笑してるし。

「御館……。私じゃ駄目なのか……」

「……私も最近影が薄いしな……」

「いやいや。焰耶と涼も好きやで？ 後、張遼と呂布も陳宮もやし」

「節操無しですよッ！？ 恋殿には指一本も触れさせないです。必殺ちんきゅーキックッ！！」

陳宮が飛び蹴りをかましてくる。

「甘いで陳宮ッ！！」

ガシッ！！

「へ？」

避けて陳宮の左足を掴む。

「ぬうりゃあああッ！！」

俺はハンマー投げのように回転して陳宮を投げた。

しかし、投げた先がたまたま開いた窓やった。

そこへスポッと陳宮が入ってそのまま外に落ちた。

ちなみに訓練所の場所は二回。

「ああああああ………」

「……あー、陳宮。マジでゴメン。まさかそこに窓が開いたてるとは知らなかった」

落ちた陳宮に密かに黙禱を捧げた。

「……ちんきゅー……大丈夫？」

呂布が俺に聞いてくる。

「まあ呂布好きの陳宮やから死んでないやろ」

「死んでないのですッ!!」

Bannonと陳宮が駆け登ってきた。

「すまんすまん」

「……ちんきゅー……キックは駄目………」

俺が謝ると呂布が陳宮を叱る。

……叱ってるんか？

「恋殿〜(T|T)」

陳宮……スマン。

「……真正面から言われるのは恥ずかしいな……」

何か張遼が言ってるけどまあええや。

「んで華雄。返事は？」

「……ほ、保留で」

華雄の顔が林檎のように真っ赤で返す。

「分かった。待っとくわ」

俺が笑うと、華雄と他の皆は顔を真っ赤にする。

……まあええや。

——オマケ——

夜中、俺が寝てると誰かが入ってきた。

「……ん……誰や？」

目を擦ると、美羽、七乃、零の三人がいた。

「どないしたんや？」

「お主が華雄に告白したと聞いてな。負けておれんと思っただのう。」

「今から夜ばいじゃ」

零がとんでもない発言をする。

「そうなのじゃ。大人しく妾達に身体を委ねるのじゃ」

美羽は顔を真っ赤にしながら、俺のベッドの中に入る。

「ちょッ!? Σ(。Д。) 美羽さん何をッ!?!」

俺が美羽に反論しようとしたら七乃が俺の唇を塞ぐ。

「……ぷはぁ……初めて会って助けてもらったあの時……裏切り者を始末する貴方の後ろ姿を見て、私は貴方に惹かれました……今では貴方に対する想いはいっぱいです」

七乃が顔を朱くしている。

「七乃……」

「だから……私達を抱いて下さい……」

七乃の目を真剣やった。

「……分かった。こいや」

俺はため息をつく。

翌日、俺が起きたのは昼前やった。

美羽、七乃、零の三人は既に起きており、三人の肌はツヤツヤしていた。

……女て恐いなあ。

とりあえず、彼女作りや作者？

『分かってるよ(T|T) by 作者』

第十六話 到着と告白（後書き）

m 華雄マジで好きす。御意見や御感想等お待ちしております m
〔

第十七話 反董卓連合（仮）結成（前書き）

何か袁紹のキャラが違う……。

第十七話 反董卓連合（仮）結成

——訓練所——

俺は訓練所で牙突の構えをしている。

「…………ツ!!」

俺は前方十メートルにいる涼に突進する。

「ハアッ!!」

俺は牙突を繰り出すが、涼が左に避ける。

「詰めが甘いでッ!!」

俺は横なぎの一撃を決める。

「ウウッ!!」

木刀の攻撃を腹で受け止めた涼はガクツと崩れるのを俺は支える。

「大丈夫か？」

「…………何とか…………しかし、牙突は手強いな…………」

涼は息を切らしながら喋る。

「まあ少し改良を加えたからな」

といっても平突きをする場所を変えただけの話やけどな。

るろ剣の斎藤一のように左片手でする場合は、相手の左脇腹（斬られる側から見たら右脇腹）を狙うように突きをする。

この場合、相手は右（斬られる側からは左）に逃げてしまうので左片手での横なぎの攻撃がしやすい。

まあ弱点の右腕は気づかんやろう。（曹操や張遼は気づくと思うけど……）

ん？右片手はしないのか？

するわけないやん。

それが男のロマンや。（違う）

「御館。此処にいたのか」

焰耶が入ってきた。

「どうしたん？」

「全員、玉座に集まれとの零殿からの言葉だ」

「何でや？」

「袁紹から使者が来たらしい」

……反董卓連合やな。

てか袁紹の奴、董卓に会ってるから董卓の性格分かってるはじやん。

「とりあえず、玉座に行くか」

俺達三人は玉座に向かった。

——玉座——

「それで美羽？何で皆を集まらせたんや？」

「麗羽姉様から手紙が来ての。十常侍の残党が生き残っていたのじゃ」

「……まさか董卓を人質にしたとか？」

「半分正解じゃ。十常侍の残党は董卓と劉協陛下を地下牢に閉じ込め、洛陽を支配しておるみたいじゃ。ちなみに他の諸侯達には董卓が悪政をしていると流していると書いているのじゃ。多分、妾らを信頼しておるからじゃな」

「生き残っていたんか……。ゴキブリ並の生命力やな……」

「隊長。ゴキブリて何や？」

真桜が聞く。

「台所における黒い塊」

『……………油虫か…………』

……皆の顔が夜叉みたいな顔になったのは秘密や。

結局、反董卓連合に参加する事に決定した。

兵力は五万五千。

俺らは、準備が終わると、連合軍の合流地点に出発した。

——1週間後——

「…………やつと着いたな」

ん〜と俺は馬上で背伸びをする。

「既に他の諸侯達も到着しているみたいですから中央の天幕に行きましょう」

七乃に言われて、俺、美羽、零、七乃の四人で天幕に向かった。

——中央の天幕——

既に、多くの諸侯達がおり、陣留の曹操、幽州の公孫賛、平原の劉備、名家の袁紹、西涼の馬騰といった人物達もいた。

けど、何か空気が重い。

とりあえず、近くにいた孫堅に聞いた。

「(何これ?)」

「(誰を総大将にするか揉めているんだ)」

……帰ってええか?

仕方なしに俺は口を開く。

「もう総大将は袁紹でええんちゃうん?」

「あら? 長門さんいたのですか?」

思いつきり天幕入ってきたやん……。

「袁紹。わざとボケてるんやったらお前のドリルくちばしをすいてしまうで」

「ボケてませんわ……てドリルくちばしとは何ですのッ!？」

「勿論サンダーやん」

「ポケモンネタは自重ですわッ!!」

何でポケモンを知ってんねんッ!!

「麗羽。このブ男を知っているの？」

謎の少女……てかこいつ……。

「何やねん貧乳クルクルドリル」

「ひ、貧乳クルクルドリルッ!？」

貧乳クルクルドリル少女——曹操が己の武器『絶』を手にする。

「き、貴様ッ!! 華琳様を侮辱するなッ!!」

夏侯惇が己の大剣を俺に向ける。

「何でや? 俺は思った事を言っただけやん。男をブ男と言った曹操みたいな」

俺がそれを言うのと曹操はクスクスと笑い出した。

「フフ。それもそうね」

「か、華琳様……」

夏侯惇憐れやなく。

「……そろそろ話を戻さないか？」

ほんまやな。

「すまんなハム」

「誰がハムだッ!!」

ハムと呼んだ女性——幽州太守の公孫賛がツツコミをする。

「まあ後で酒でもやるから何故ハムが普通なんか話し合おうや」

「……明朝まで語っていいか？」

「……それは遠慮したいな」

いじけるな。

「それじゃあ聞くけど、何で総大将に麗羽を推薦したの？」

曹操が俺に問う。

「その1、普通に袁紹が全国の諸侯達に呼び掛けたから。その2、総大将決めのめんどいから。以上」

「……普通ですわね」

「めんどいし。んじゃ総大将は袁紹でおK？」

諸侯達もようやく頷いてくれた。

「まあ、軍儀に入りますわ。先鋒は劉備さんの部隊に任せましょう」

『……………はひ？』

「お、お姉様？普通はお姉様と妾の部隊を前衛にするのでは？兵力が少ない劉備の部隊は後方にするのが適切だと思います」

「美羽さんにしてはまともな判断ですわね」

……………やっぱ袁紹でどっかボケてるな。

「袁紹。劉備の部隊は後方にした方がいいだろう」

公孫賛も賛成する。

「分かりましたわ。なら、前衛には美羽さんと孫堅さん。中軍に私、右翼は公孫賛さんと馬騰さん。左翼は華琳さん。後方は劉備さんに任しますわ」

そこで軍儀が終わった。

とりあえず袁紹に聞きたい事あるし。

「なあ袁紹。何で他の諸侯達には董卓が悪政を敷いているって言ったんや？」

「? ? 何となくですわ」

……ほんまに帰ろうかな……。

とりあえず、先に馬騰の天幕行くか。

何か顔色悪かったし。

二日酔いか？

……んなわけないか。

第十七話 反董卓連合（仮）結成（後書き）

御意見や御感想等お待ちしておりますm
〔
m

第十八話 馬騰と劉備（前書き）

最後のところ、書いていなかった部分があったので書き足しました。

第十八話 馬騰と劉備

連合軍の天幕を歩いていると『馬』と書かれた牙門旗を見つけた。

此処かな？

とりあえず兵士に声をかける。

「なあ、此処らへんて馬騰の天幕か？」

「はい、そうですけど……。どちら様でしょうか？」

「おう名前言うの忘れていたな。俺は袁術のところで客将をしている天城長門や。馬騰いるか？」

「あ、あの天の御遣いッ！！しょ、少々お待ち下さいッ！！」

兵士慌ててるな。まあ無理ないか。

5分待っているとさっきの兵士が来た。

「お待たせしました。どうぞこちらへ」

俺は兵士に案内され、馬騰の天幕に向かった。

——馬騰の天幕——

「馬騰おるか？」

俺が天幕に入ると、馬超を大人にし、髪をただ結んだだけの女性がいた。

「天の御遣いか。私に何か用かい？」

「ああ、さっきの軍儀の時に馬騰の顔色がかなり青ざめていたからな。ちよつと心配してな」

「……………そうか？」

……………一瞬やけど、動揺していたな。

その時、天幕に誰が入ってきた。

「天の御遣いが来たって本当か母上ッ！！」

……………馬超やん。

「……………翠。話しの最中に入ってくるな」

馬騰が馬超を睨む。

「け、けど母上。天の御遣いは妖術を使うと聞いたんだ。なら、母

上の肺の病も「それ以上言うなッ!!」……母上」

馬騰が馬超を一喝する。

「……やっぱ病か……」

「ッ!?……気づいていたのかい？」

「多分そうやろなあと思っていたけどな……」

「お願いだ天の御遣いッ!!母上を、母上を助けてくれッ!!」

馬超が俺に頭を下げる。

「翠ッ!!」

「……母上はまだ西涼に必要な人なんだッ!!だから頼むッ!!」

「やめな翠ッ!!。……病にかかったのは私の運命なんだ」

「運命かどうかは神様が決めるもんや馬騰。……馬超、一応、身体を治す術はあるけど、馬騰に効くかは分らん。それでもか?」

「……それでもだ。頼むッ!!」

「……馬騰。可愛い娘さんが親のために頭を下げてるんや。ここで受け入れなかったら娘を裏切るで?」

俺は馬騰に決断を迫る。

「……分かったよ、受け入れるさ」

「は、母上ッ!!」

「さあ、やってくれ」

馬騰が服を脱ごうとする。

「待て待て。服は脱がんでええから」

「そうかい」

「まあ、とりあえず……リカバーッ!!」

『ッ!?!』

馬騰の身体が光りに包まれる。

程なくして光りは収まる。

顔を見る限り、さっきよりかはマシやな。

「……どないや馬騰?」

「……かなり身体は楽になっているよ」

……成功やな。

テイルズで例えるなら肺の病（恐らく肺ガンか結核）は、状態異常になるからな。（多分……）

「とりあえず、後で医師に見せてな。んじゃあな」

「天の御遣いッ!!」

俺が天幕を出ると馬超も慌てて出てくる。

「どないした？」

「……あ……ありがとうッ!!」

馬超は顔を真っ赤にしながらまた天幕に戻った。

……可愛いなあ……。

次は劉備のところへ行く。

——劉備軍陣営——

劉備軍の陣営の真ん中辺りに行くと、曹操達がいた。

……めんど……（`Д、`）

「関雲長。もう一度言うわ。私の軍に来ないかしら？」

「残念ですが、私は行きません」

「んじゃあ俺のどこ、来ない？」

「ですから私は……て誰ですか？」

睨むなよ。

……誰か知らんかったら当たり前か。

「あら、天城じゃないの」

「貧クルドリルもいたんか」

「誰が貧乳クルクルドリルの略を言えと？」

「俺」

「……食えないわね」

「それより、お前がメシ食え。それやから貧乳やし身長も伸びひんのや」

「……死にたいの？」

「当然の事を言ったまでやから武器を持つな」

「あのう……天城さん。何か御用ですか？」

劉備が俺に尋ねる。

「ん？やから関羽を勧誘にしきてんやけど。ついでに趙雲も」

「ほう……私ですか？」

今まで傍観していた趙雲が歩み寄る。

「関羽、趙雲の二人は劉備の元におらすのは二人の武を腐らせるよ
うなもんや」

「何イツ！？貴様、桃香様を愚弄する気かッ！！」

関羽が己の武器を俺に構える。

「劉備玄德に問う。お前は何故、平原の兵を率いて反董卓連合に参
加した？」

「……私は董卓が洛陽で悪政をしていると聞きました。私はその困
っている人達を助けたいんですッ！！」

「……………（ムム）」

「……こいつ…阿呆やろ……」。

帰ろ。

「……何処に行くの？」

曹操が問う。

「……こいつ阿呆やからもう帰るわ。曹操、関羽を勧誘すんのやめ
とけ。この馬鹿どもは『義』を尊重し過ぎとる。趙雲は別や。趙雲、

嫌になったら何時でもこい」

俺は劉備の天幕を出る。

「待て貴様ッ!!」

「ん？」

関羽が青龍偃月刀を俺に向ける。

「桃香様を侮辱するのはもう我慢ならないッ!! 此処で討ち果たしてくれるッ!!」

「あ、愛紗ちゃん止めてッ!!」

劉備が関羽を止める。

……どうでもええや。

「天城」

趙雲が近寄ってきた。

「何や？」

「何故、桃香殿を阿呆呼ばわりをしたのだ？」

「ん？ ああ、いくら袁紹からの手紙で董卓が悪政しているからってそれを信じて軍を率いて来るなんて頭おかしいやろ？ 普通は『本当に悪政しているのか？』て疑問に思って間諜やら使って洛陽の様子

を探るのが普通や」

「む……確かに……」

「それを何も考えずに来る劉備の頭がおかしいと俺は言うねん」

「だが、桃香殿は戦わずに話し合いで分かり合えると信じている。それを裏切るわけにはいかない」

「趙雲。話し合いで分かり合えたら黄巾の乱も起こらんかったで」

「……………」

趙雲は黙っていたが、俺は無視して陣営に帰った。

——劉備陣営——

「桃香様。あ奴の事など気にしないで下さい」

「うん……ありがとう愛紗ちゃん」

「では失礼します」

関羽が劉備の天幕を出る。

「……………」

劉備は人気がない事を確認すると、ニヤリと笑い出す。

「フッフ。天城さんの前では困っている人達を助けたいと言ったけど、本心は違うんだよね」

劉備が備え付けのベッドにボフツと倒れる。

「天の御遣い天城長門……私の邪魔はさせないよ？」

劉備は天井を見ながら笑った。

——シ水関——

城壁から一人の女性が景色を眺めていた。

そこへ、さらしを巻いた女性が来た。

「此処にいたんか華雄」

「…………張遼か」

「何してたんや？」

「…………景色を眺めていた。最期の見納めにな」

華雄の言葉に張遼は笑った。

「アッハッハッハッ!! 華雄が最期の見納めで景色眺めてたって……くく……」

張遼が笑いを堪えている。

「……悪いか？」

「……いんや……」

張遼は持っていた酒を飲む。

「ん……ん……ふはあ……。反董卓連合に長門が加わっていたのが原因かな？」

「……………」

華雄は何も言わない。

「大丈夫や。長門や、焰耶達も洛陽の現状を分かっているて。袁紹も無理に反十常侍連合なんて表明したら十常侍が黙っていいひんやろ。恐らく十常侍は陛下を人質にするやろな」

「……だろうな。しかし、私は武官だ。戦えといったら戦うしかない。……無論、長門とでもだ……」

華雄はそう言って城壁を降りた。

「……………しかし……ほんまにめんどいなあ……。てか、あの男は何者やろ？」

張遼の視線の先には、乱れた青い髪と鍛えられ、全身を覆う筋肉を持つ男が眼を閉じて瞑想をしていた。

「まあ……月の言うことはよう聞くからええけどな……」

張遼はそう呟くと、自室に戻った。

「……………行ったか……」

瞑想をしていた男は張遼の気配が完全に消えると、眼を開く。

険しい瞳は夜空を見上げる。

「……………しかし、よもや俺が生きているとは思わなかった。俺は確かに神の眼に飛び込んで一生を終えたはずだ……」

しかし、男は微笑む。

「まあいい。俺は約束を守らねばならん」

男は傍らに置いていた斧を拾う。

「……………そうだろ? 『サラ』よ」

男は夜空に呟いた。

第十八話 馬騰と劉備（後書き）

やべえ。最後の男、テイルズ知ってる奴はすぐ分かる。

まあ反省はしてるけど後悔はしてない。

御意見や御感想等お待ちしています m (m

第十九話 シ水関の攻防その一（前書き）

……何か後半ギャグです。マジでギャグです。大事なことになるので二回言いました。

第十九話 シ水関の攻防その一

——シ水関——

「……あれがシ水関やな……」

俺達がシ水関に到着すると、既に、シ水関には守備隊がいた。

旗には『華』と『張』の文字が書いている。

「……持久戦やろうな……」

俺は馬上で呟く。

その時、伝令が来た。

「報告します。後方の劉備軍の将である関羽、趙雲が野次を行って敵将華雄をおびき出すと申しています」

「……長門。お主はどう思うのじゃ？」

美羽が俺に聞く。

「どうやらな……。点数稼ぎか、それともただ単におびき出すのか……。けど、あいつらの手は借りん。伝令、悪いがもうひとつ走り

してくれ。『氣遣い無用なり』や」

「分かりました」

伝令が敬礼をして走っていく。

——シ水関内部——

「華雄、ほんまに行く気か？」

出撃準備をしている華雄に張遼が尋ねる。

「長門が突撃したらな。張遼は撤退する準備を頼む。連合軍が一挙に来たら我々ではシ水関は持たないだろう。後方には呂布達がいる虎牢関で何とか勝てるかもしれない」

「けどな華雄。あんたもおらんと「猪突猛進の私がいれば、陳宮が考える策もズタズタになるだろう。ならばだ……私が此処で連合軍に手痛い損害を与えれば、虎牢関でも少しは楽になるはずだ」……」

張遼は黙り込む。

そしてゆっくりと溜め息をはいた。

「……分かった。此処は任せたで華雄。……死ぬなよ。また酒を飲もうや」

「フッ……無論だ。それと、旗は置いていけ。私が倒れても張遼の旗がある限り張遼がいると錯覚を作らせる。……といっても、僅かな時間しかないと思うがな」

「分かったわ。ほなな」

張遼は華雄に手を振る。

「ああ。またな」

華雄も手を振り、撤退準備をする張遼の部隊を見送った。

「……すまないな、お前達。お前達を家族の元に帰したかったが……無理なようだ」

華雄は部隊の兵士に言う。

「いえ……この戦が始まった時から覚悟はしていました」

副官の言葉に兵士達は頷く。

「……そうか……。ところで、あの男はどうした？」

「はあ、先程からいなくなっておりまして……」

「まあ構わんさ」

華雄はシ水関手前で停滞している連合軍を見た。

——崖——

華雄が言っていた男は連合軍の左翼にある崖にいた。

「フッフッフ……。俺の斧が貴様らの血を欲している」

男は、崖から飛んだ。

——左翼曹操陣営——

「やはり袁術軍は突撃しないわね」

「は、真正面からの激突を避けたのか、それとも董卓軍とは親交があつたので動けないと思います」

旬イクが報告する。

「まあいいわ。袁術が動かないなら私達も動かないわ」

その時だった。

「ぶるうわあああああああああああああああッ！！！」

『ッ！？』

ドゴオオオオオオオーッ！！！！

謎の叫び声と共に後方から地響きが鳴り響く。

二人は落馬しそうになるが、何とか堪えた。

「な、何が起きたッ！？」

曹操が叫ぶ。

後方を振り返ると、今さっきまでいた精鋭の兵士達が吹き飛ばされていた。

しかも、いつの間にか出来た浅いクレーター（深さは約一メートル）には一人の男がいた。

男は左手に斧を構えており、斧は地面に突き刺さって、斧の周りの地面はひびが入っていた。

「貴様ッ！！何者だッ！！」

夏侯惇が曹操を守るように前に立って大剣を構える。

しかし、男は夏侯惇の質問を無視した。

「貴様らアッ！！こんなところで長々と何をしている？」

男の声は連合軍全体に響き渡るような声である。

「鼠のように逃げおおせるか、この場で死ぬかあッ!! どちらかあえらあべいいいッ!!!!」

男の怒号は連合軍全体に聞こえた。

——袁術陣営——

『鼠のように逃げおおせるか、この場で死ぬか、どちらかあえらあべいいいッ!!!!』

「ブーッ!! Σ(。Д。)」

え?.....えエッ!?

「.....嘘やろ?」

何かねえ。デステニーでは亡霊で出演、デステニー2では生き返って、マイソロ2では負の塊やつけ? その他のシリーズでも大活躍してるあの人の叫び声に聞こえたのは俺の気のせいかな?

.....とりあえず確認しに行こ。

曹操の陣営がやられとるな。

——曹操SIDE——

「骨まで碎けろォッ!!」

ズシャッ!!

「ギャアアアッ!!」

また一人、私の精鋭の兵士がやられた。

あの男は一体何者なの？

「華琳様ッ!! 此処は危険ですッ!! 避難して下さいッ!!」

大剣を構え、男から私を守るように戦う春蘭が叫ぶ。

「黙りなさい春蘭ッ!! 此処で逃げては私は覇道を歩めないわッ!!」

「し、しかしッ!!」

「フン、安心しろ。今日の俺は紳士的だ。運が良かったな」

「んじゃあ明日は？」

誰かの声が聞こえる。

「明日は織田信長のだッ!! みいいつ秀ええッ!!」

「流石本人。昨日は？」

「昨日は穴子的だッ！！おいフグ田くん。今日、飲みに行かないか？」

「明後日は？」

「明後日は音速丸のダッ！！イゼルローンは陽動、本隊はフェザーン行きときたぜ……」

「いや、それ銀河英雄伝説やし……（▽；）しかも、作者も知らんで」

「なぬウッ！！……それならば……ではこれより試験問題を口頭で伝えようぞ。試験内容はの中から一つ選ぶんさい。一番、消費税撤廃。二番、街中のカップルから罰金十万円。三番、火星人を抓って泣かすう……て、何を言わせてんのじゃああああッ！！！」

「お前が乗るからやん……。曹操大丈夫かあ？」

男が何かに突っ込んでいると、私の横に天城長門がいた。

——曹操SIDE終了——

やっぱ、今日は厄日やなあ。

なあ〜んで、バルバドス・ゲーティアが恋姫の世界におんの？

北斗七星の横にある死兆星は見えてなかったんけど……………OrZ

「曹操、とりあえず下がっつけ。死ぬで」

「……………分かったわ」

曹操と夏侯惇が下がる。

「……………話しは終わったか？」

「律儀やな」

「今日の俺は紳士的だったはずだ」

「そして明日は信長か」

「みいっつ秀ええッ！！」

「いきなり襲うんかいッ！！Σ（。Д。）てか俺は三秀ちゃうわッ！！」

バルバドスとの戦闘が始まった。

てか俺死亡フラグ？

第十九話 シ水関の攻防その一（後書き）

御意見や御感想等お待ちしておりますm
〔
m

第二十話 シ水関の攻防その二（前書き）

バルバトスの戦いが中途半端になった……。。

第二十話 シ水関の攻防その二

「ぶるうわああああッ！！」

「うわっと」

ブンッ！！

バルバトスからの斬撃を何とか避ける。

「貴様あッ！！さっきからちょこまかと逃げおって、さっさと当たれえッ！！」

「いや当たったら死ぬから（㇏㇏）」

「なら今すぐ死ねえッ！！」

「まだ死兆星を見とらんから大丈夫やッ！！」

バルバトスとの戦闘は既に30分が経っている。てか俺は避けるだけ。

戦闘中にシ水関にいた華雄が追い討ちをかけるように打って出て、連合軍に襲い掛かってきた。

「厄介になってきたなあ」

「よそ見をするとはいい度胸だッ!! 灼熱のバーンストライクッ!!」

「ゲッ!?! Σ（。㐤。）メールシュトロームッ!!」

天空から落ちてくる三発の爆炎を何とか避けて、バルバトスの足元に巨大な渦巻きを発生させる。

「ぬおッ!!」

しかし、バルバトスはただのけ反るだけ。

「…………えゝゝゝ（㐤、㐤）」

確かデステイニーでは鋼体やつけ?

二十回くらいやらなあかんのやろ?

「フフフ。きかなあ」

「…………もう帰っていいすか?」

死にたくないし。

「行くぞッ!! ジェノサイドブレイバー……ッ!!」

衝撃波がくる。

「やっべえッ!!」

俺は何とか回避したけど、後方にいた曹操の兵士達に直撃した。

『ギャアアアアッ!!』

あ、百人くらい死んだな。

「おいッ!! しっかりしろッ!!」

曹操軍の一人の兵士が重傷の兵士に手当てする。

……あ、絶対秘奥義発動や。

だってバルバトスの目が一瞬光ったし。

バルバトスは手当てをする兵士に近寄る。

「ヒィィッ!？」

「アイテムなぞ……使ってんじゃあぁねえーッ!!」

「ギャアアアアッ!!」

あ……死んだな。

「フフフ。さあ、やろうか」

「隊長ッ!？」

そこへ、風が来た。

「ほう。死にたがりなのが来たか」

「阿呆ッ！！来るなッ！！」

「嫌ですッ！！」

「そうやで隊長」

真桜が弓隊を率いて来た。

焰耶、雫、樹梨もいる。

「華雄は捕らえた。後はお前だけだ」

樹梨がバルバトスに言う。

「…………流石にこれだけいたら貴様との勝負は無理だな。仕方ない、ここは引くでしょう」

バルバトスがシ水関に向かって歩く。

「我々が逃がすと思っているのか？」

樹梨達がバルバトスの行き先を阻む。

「樹梨、やめとけ。死ぬで」

「……………」

樹梨達は俺の言葉を受けて、渋々と道を開ける。

「フン、今日の俺は紳士的だ。見逃してやろう」

「そして明日は織田信長」

「みいいつ秀えええッ！！貴様、何故儂を裏切ったああッ！！」

「ちなみに明々後日は？」

「明々後日はセルだ。畜生おおッ！！……………なんちゃって♪バカめ、俺の細胞にはピッコロの細胞もあるのだぞ……………てまたやらすな
アアアーーーーッ！！！！」

「いや、お前が乗るからやろ」

結局、バルバトスは虎牢関に逃げた。

余裕で歩いて。

「……………てかあのバルバトスはボケが多いな」

作者がやりたいだけか。

とりあえずは陣営に戻った。

——袁術軍陣営——

「……………華雄たああゝゝんッ!!」

「キャアアッ!! ちょ、抱き着くなアアア——ッ!!!」
／／／／／

縄で縛られた華雄を見て、思いっきり抱き着く。

『……………』

……何か皆の様子がおかしいから離れよ。

「ま、一応俺らは反董卓連合に参加してるけど、袁紹と俺らは真犯人知ってるから」

「……………そうか。なら安心だ」

華雄はホッと息をはく。

「ま、少しの間は我慢しといてな」

「それはやむを得ない事だ」

華雄は頷く。

「報告します。袁紹様がお会いしたいと……」

兵士が報告に来た。

「……やはり十常侍が裏にいましたのね」

俺らは面会に来た袁紹に説明する。

「……長門さん。お願いがありますわ」

「……嫌々な予感しかないんやけど……」

「……虎牢関を攻略後に、単独で長門さん達の部隊で陛下を救出してほしいのです」

……やっぱり……。

「ですがお姉様。虎牢関にはあの男が……」

そう。バルバトスがおる。

……どうしよう？

「……待てよ」

華雄が呟く。

「どうした？」

「確かあの男は董卓様の言うことだけは聞いていたぞ。賈ク達の言うことは全く聞いてないがな」

「董卓だけやて？」

……何でや？

「よく分からんが……」

皆が考えるけど、分からんよな。

「……そういや、華雄隊はどうなってる？」

樹梨に聞く。

「半数は逃げた。残りは捕虜にしているが……」

フムフム……。

「……いい策が浮かんだかも……」

「ほんまかいな隊長？」

「ああ、華雄隊の捕虜を放すんや。そっからが本題や」

——虎牢関——

「張遼様。華雄隊らしき兵士達が来ています」

「何やて？」

張遼が城壁の下を見ると、華雄隊の兵士十数人がいた。

「自分達は連合軍に捕われていた華雄隊です」

先頭にいた兵士が告げる。

「それが何で逃げてこれたんや？」

「は、袁紹殿が『十数人程度で戦局はひっくり返せませんわオーホッホッホッ！』と言って自分達を解放しました」

「……余裕やな。まあこっちは一人でも欲しいからな。おい、城門を開けるんや」

ギギイッ！！

解放された兵士達が虎牢関に入る。

「さて……呂布ちゃんと連合軍の相談するかいな」

「張遼將軍」

張遼が行こうとするのを一人の兵士が呼び止める。

「どないした？」

「こちらへ来て下さい」

「どないした？」

「じゃん」

人混みがないところに連れてこられた張遼は兵士に問うと、兵士は頭の鎧を取る。

「……長…門？」

「ピンポン、正解」

俺は笑う。

張遼はア然としている。

「な、何で……」

「勿論、助けにや。袁紹軍と袁術軍は華雄から事情を聞いている。んで、俺は陛下と董卓の救出任務を言われてん」

「ほ、ほんまにッ！？なら話しが早いな。陛下と月っちは洛陽の宮殿の地下牢に閉じ込められているはずや」

「地下牢か……分かった」

俺は張遼と別れて洛陽に向かった。

途中、兵士達に何処行くのか聞かれたけど、全部「洛陽に状況報告しにいく」とごまかした。

第二十話 シ水関の攻防その二（後書き）

御意見や御感想等お待ちしておりますm
〔
m

第二十一話 救出(前書き)

明けましておめでとうございますm (mキャラ崩壊してます。
何でこうなったんや? 引き返すなら今のうちやで。

第二十一話 救出

——洛陽——

「（侵入成功やな）」

俺は華雄隊の鎧を来て宮殿内を走る。

地下牢は何処やったけな。

「……い……」

「ま……よ……」

「あん？」

近くにいた兵士達の話し声が聞こえる。

俺は気づかれへんように近づく。

「十常侍様が、陛下や董卓達を犯していいってよ」

「おいおい、本当かよ？」

「ああ。さっき、何人かが向こうにある地下牢に行ったしな」

「(……やべえな。はよ行かんと)」

俺は話していた兵士が指指す先の地下牢に走る。

無論、見つからずにや。

——地下牢——

「へっへっへ。董卓や陛下もこうなってはただの女だな」

兵士の部隊長が笑う。

地下牢の壁に、董卓、賈ク、劉協が裸で吊されている。

「隊長。早くやりましょうよ」

「それもそうだな」

「……ク……」

賈クが兵士達を睨む。

「その目を粉々にするのが楽しみだな」「悪いけど、そら無理やな」
「あん？」

兵士達が振り返ると弓を構えた長門がいた。

「雷雨ッ!!」

八本の矢が瞬く間に、八人の兵士の命を絶つ。

「だ、誰だ貴様はッ!?!」

「クズに名乗る気はないわッ!! 豪烈ッ!!」

俺はしゃがんで、力を溜めて高速の矢を発射。

部隊長に命中する。

「ヒイイッ!?!」

残った兵士が後ずさりをする。

「逃がさんでッ!! ハアアアアアッ!!」

俺はオーバリミッツを発動させる。

「全てを滅し、無に戻せッ!! シャイニング・バインドッ!!」

光りの波動が兵士達を襲う。

『ギャアアアアアッ!!!!』

兵士達死亡。

「董卓、賈ク、陛下。大丈夫か?」

俺は羽織りを脱いで、董卓達に着せる。

「……………ありがとうございます」

「助かったわ……………」

「余は大丈夫じゃ」

三人はそう言うけど、顔面蒼白してるし。

「……………貴様、何をしている？」

俺の頭に斧が乗せられた……………まさか。

「……………バルバトス…。何でお前が此処に…」

「フン、貴様が陣営に入った時を見てな。此処まで追い掛けていたのだ……………」

……………あかん。

迂闊やったな。

「バ、バルバトスさん止めて下さい。この人は私達を助けてくれたんです」

董卓が、俺とバルバトスの間に立つ。

「……………本当か？」

「はい……」

「……そうか」

……あり？随分とあっさりやな。

……そういや、華雄からバルバトスは董卓の言葉だけを聞いてたな。

「……では、お前らを犯そうとしたのは十常侍とやらだな？」

バルバトスが董卓を睨む。

「へう。は、はい」

董卓は怯えながらも答える。

「ちよ、月を睨まないでよッ!!」

賈クが反発する。

「黙ってる小娘。……ナガトと言ったな。貴様との戦いは暫し休戦だ」

バルバトスは斧を構えて出口に向かう。

「十常侍とやらを全員……潰すッ!!」

バルバトス怖ッ!!

バルバトスは出口に出て殺戮を始める。

……そういや、何で董卓だけの言葉を聞くんや？

俺は董卓を見る。

「へう……」

董卓は顔を赤くする。

かわええなあ。

……待てよ。

……まさか。

「……バルバトスのロリコン説急浮上ッ!? Σ(。Д。)」

俺は思わず叫ぶが、かまへん。

そうか……バルバトスはロリコンやったか。

「だあれがロリコンだー！ーッ!!」

どっかで声が聞こえるけど、無視やな。

「董卓……夜道は気をつけや」

「はい？」

董卓は首を傾げる。

「とりあえずバルバトスを追いつけよう」

俺達四人は地下牢を出た。

――玉座――

「追いつめたぞ」

バルバトスがニヤリと正面には恐怖で糞尿を垂らしている十常侍がいる。

「ただでは死なさんぞッ!! ワールドデストロイヤーッ!!」

はい、十常侍死亡。

「塵も残さんッ!! ジェノサイドブレイバーッ!!」

それから、ワールドデストロイヤー↓ジェノサイドブレイバー↓ワールドデストロイヤー↓ジェノサイドブレイバーの繰り返しが約10分続いた。

てか、よう宮殿崩壊せえへんな。

ちなみに、十常侍がいた場所は何もない。

文字通り、塵も残してない。(核爆)

「……俺の……に……」

バルバトスが何か言ってるけど聞こえへんな。

「何か言ったか？」

「何でもない。んじゃ死合おうとするかッ!!」

バルバトスが斧を構える。

……もうやだこいつ……。

すると、董卓が俺の前に立つ。

「……そこを退け」

「……嫌です」

「何ィ？」

「この人は私達を助けてくれました。勿論、バルバトスさんです。それなのに殺し合うなんて止めて下さいッ!!」

董卓がバルバトスを睨む。

「……ぬう……」

バルバトスが動揺している。

テイルズのゲームではありえへん事や。

しかも相手は董卓。

……やっぱバルバトスロリコン「ロリコンじゃないって言ってるだろうがアアアー……ッ!!」

バルバトスが吠える。

「へう……」

董卓が恐がってるし。

「ち、違うぞ。月に言ったわけでは……」

あのバルバトスがアタフタしてる。(。D。)

………てちよっと待てや。

「何であんたが月の真名を知ってるのよッ!？」

「そうやッ!! 何で知ってるねんッ!!」

「ググ……」

……何かテイルズの特典DVDのバルバトスみたいやな。

「な…何で私の真名を？」

董卓がおそろおそろ上目遣いでバルバトスを見る。

グハッ！！

あれは効くわ……。

「……ぬぬぬ……」

バルバトスが悶えてる。

……気持ち悪ッ！！Σ（。Д。）

「………分かった。教えよう」

バルバトスが首にかけてたペンダントを取る……ってそんなん持ってたっけ？

ペンダントを開けると、中には写真があった。

写真にはバルバトスと一人の女性がいた。

………て。

「これ董卓やんッ！？」

俺は驚く。

「……違うわ、月じゃない。この人は董君雅様よ」

「董君雅て？」

「月のお母様よ」

「……マジ？」

俺は写真をよく見ると、確かに董卓は銀か灰色に近い髪の色で肩のくらいまでやけど、写真の人は髪が腰くらいまでであった。

「……俺の『妻』だ」

……今何て言った？

「……あゝ、今何て？」

「だから俺の『妻』だ」

『………何イイイイイーッ！！！！』

……嘘やろ？

「……よく分からんのじゃが」

陛下が口を開く。

いたの忘れてた……。

「お主の妻がこの人だと分かるが、これと『月のどう関係する』んじゃない？」

ポク。

「へう……………」

気絶していた。

「…………嘘やろ…………作者ッ!! 嘘やと言ってくれッ!!」

ゴメン、マジやからb y作者。

第二十一話 救出（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m
〔 m

第二十二話 バルバトスの過去（前書き）

バルバトスのキャラが崩壊しています。いやマジで崩壊しています。大事な事なので二回言いました。それでもいい方はどうぞ御覧下さい。

第二十二話 バルバトスの過去

「とりあえず、取り調べな。バルバトス、董君雅さんを襲ったやろ？」

それが絶対やと思う。

「違う。両想いだ」

「……嘘つけや。お前、天地戦争の時にディムロスを倒すためにアトワイト拉致ったやん」

「……あれは命令だ」

「命令？」

「ああ。……説明するが長いぞ？」

「説明によるけどな」

俺は言う。

「……俺は元々は地上軍のある部隊長をしていた。階級は大尉だ」

「優遇されてたんはほんまやねんな」

「ああ。俺はただ、強さを求めて手段を選ばない残虐をしていた。そんなある日、一人の女性が俺の部隊に配属された。その名はサラ・ケルヴィン。後の俺の妻だ」

……ケルヴィン？

「ケルヴィンでファンダリアの？」

「ああ、ファンダリアを統治するケルヴィン家だ。その時はただの貴族だがな」

成る程。

「俺の部隊は残虐が酷かったからすぐにやめると思っていたんだが……あいつは事あるごとに俺に文句を言ってきた。ジェノサイドブレイバーやワールドデストロイヤーを食らわすがあいつは避けるのが上手くてな。周りの奴らからは痴話喧嘩とよく言われていた」

……それを避けるサラさんはすげえとしか言われへんな。

「そんなある日、サラから告白を受けた」

「…………お前が襲ったんじゃないくて？」

「ワールドデストロイヤーを食らわすぞ？」

斧を首に近づけるな。

「俺は勿論断った。強さだけを求めてたからな。だが、サラは諦め

ずに何度も俺に告白してきた。恋愛のれの字も知らない俺にな……」

……何かバルバトスがカッコイイ……。

「夜ばい紛いまでするようになったから遂に俺は承諾した」

夜ばいて……サラて人怖いな……。

てか夜ばいされるバルバトスで……（笑）

「それからの生活は俺にとって、本当の幸せだった……。だが、あいつが全てを壊したんだ……」

「……誰や？」

「……お前もよく知っている奴だ」

ポク

ポク

ポク

チーン。

「……まさか……」

俺は驚く。

ちなみに董卓達は何の事か分かってない。

「……天上王ミクトランだ」

出たー、ベジータやん。

「奴は地上にいた時から俺に目をつけていた。そして、クーデターで奴が独裁者になった時、サラがさらわれた。奴はサラを帰す代わりに天上軍に加われと言った」

「俺は悩んだ。だが、俺は一部隊の隊長だ。天上軍を討とうとしているディムロス達を裏切ってまで天上軍に加われなかった。焦ったミクトランは、サラをダイクロフトから落とすと俺を脅した。その時、サラは「貴方の子を宿していますが、ごめんなさい。愛しているわ」と言って自ら地上に落ちた。サラは人質になった自分を俺に迷惑かけたくなかったのだろう。俺はサラが落ちた事に呆然としていたのが失敗だった。ミクトランは俺を捕らえて洗脳した。後はお前が知っている出来事だ」

……成る程な。

「でもさ、何で董卓が自分の娘だと分かったんや？」

「……サラが死ぬ前にもし、子が生まれたら月にしようと言っていた。『ディムロスやアトワイト達は太陽のような人達。でも私達の子が生まれたら月のような綺麗な子になってほしい。だって、太陽は熱いけど、月は綺麗でしょ？』だとさ」

「……成る程。陰と陽みたいなんもんか」

合ってると思う……多分。

「……では」

ここで董卓が口を開く。

「……貴方は私の父なのですか？」

「……ああ」

感動の親子の再会か？

「でも、私はまだ貴方を父として見れません。それでもいいですか？」

「構わん。今度、サラの話しでもしてやろう」

……まあ、大丈夫やろうん。

「では陛下、虎牢関まで御一緒に来て下さい。陛下の口から連合軍に説明しなければなりません」

俺は陛下に説明する。

「良かろう。天城、感謝する」

俺達は虎牢関に向かった。

第二十二話 バルバトスの過去（後書き）

御意見や御感想等お待ちしておりますm
〔
m

第二十三話 終わりを告げる言葉（前書き）

大学のテスト期間やのに投稿……。単位落ちるかもなあ。

第二十三話 終わりを告げる言葉

——虎牢関——

「へ、陛下ッ!？」

虎牢関で、呂布と陳宮と張遼が俺達を出迎えてくれた。

ちなみに、洛陽にいた十常侍の私兵は既に武装解除している。

「呂布、陳宮、張遼。よく戦ってくれた。戦いは終わりじゃ」

劉協が三人を労う。

「ハハハハッ!!」

陳宮と張遼が臣下の礼をする。

呂布は無言でしてた。

「天城。行くぞ」

陛下が言う。

「分かりました。三人とも任しとけや」

「……頼むで天城」

張遼が言う。

とりあえず、陛下と虎牢関の外で陣を張っている連合軍に向かった。

——連合軍陣営——

「麗羽、いつまで此処にいるつもりなの？」

軍議で曹操が袁紹に言う。

「……華琳さん。気持ちは分かりますが、あの男が虎牢関にいるのですよ？ 一歩間違えば連合軍は全滅しますわ」

袁紹の言葉に曹操は何も言えなかった。

実際、あの男の襲撃により曹操の精鋭の兵士約千二百名が死傷していた。

「でも、食糧も底を尽きかけていますよ」

劉備が言う。

「……非常にやばいな」

孫堅も眩く。

「（長門さんは何をしているんですの……）」

袁紹が溜め息をはいた時、兵士が天幕に入ってきた。

「ほ、報告しますッ！！虎牢関より二人の人間がこちらに向かって歩いてきますッ！！」

「（まさかッ！？）」

袁紹と袁術がハッとする。

「二人の詳しい特徴を教えなさいッ！！」

袁紹が言うと、再び兵士が来た。

「報告しますッ！！二人の人間のうち、一人は……天の御遣いと思われまッ！！」

『ッ！？』

天幕内がざわつく。

「……麗羽姉様」

「……成功したようですわね」

袁術の言葉に袁紹はニヤリと笑う。

「麗羽。どういう事なの？」

曹操が尋ねる。

「後で説明しますわ。とりあえず、迎えに行きましょう」

「隊長ッ!？」

あ、凧が走ってきた。

「御無事で何よりですッ!……あの、もしかしてその方は？」

「陛下や」

「こ、これは失礼しましたッ!！」

凧が陛下に謝る。

「よい。すまぬが、袁紹達の元へ連れてって来れぬか？」

「ハッ!！」

「長門オッ!！」

「ゴフォッ!！」Σ（。Д。）「

み、美羽がタツクルかましてきた。

……あれ？何か前もあったな。

「長門さんッ!!」

あ、袁紹達も来た。

「よく、陛下を無事にお連れしましたわね」

「任しときと言ったやろ」

「長門。最近、お前を見てなかったが、それでか」

孫堅が納得したように頷く。

「とりあえず、天幕行こうや」

——天幕——

「カクカクシカジカ……ということや」

「……何を言ってるの？」

怒るなよ曹操、ちょっとした冗談やのに……。

まあ、とりあえずは全て話した。

「……そういう事だったのね。麗羽が何かを隠しているのは分かってたけど……」

「ごめんなさい華琳さん。何時何処で間諜がいるのか分からないので信頼出来る美羽さん達にしか言えませんでしたわ」

袁紹が曹操に謝る。

「ま、過ぎた事は気にしないわ」

「うむ。皆の者、妾のせいで迷惑をかけた。許してくれ」

陛下が皆に頭を下げる。

「陛下、頭をお上げ下さい。我々は陛下の臣下なのです。陛下に何かあれば駆け付けます」

……何か袁紹が眩しいな。

「うむ、皆には少ないが恩賞をやろう。洛陽に行くのじゃ。戦は終わったのじゃ」

こうして反董卓連合は陛下の救出によって幕を閉じた。

——洛陽——

「長門。本当にありがとう」

洛陽で祝勝会が行われている時、俺は陛下に呼ばれていた。

「いえ、自分は命令に従ったまでです」

「いや、それでも感謝仕切れん。どうじゃ私を嫁にでもせんか？」

はああああッ!! Σ（。Д。）

「ちょ、陛下酔ってるでしょッ!？」

「ナハハハハ。私は酔ってはおらんぞ」

顔を真っ赤にしてるから説得力がないで。

「何じゃ、不満か？私はこれでも胸はかなりある方だが……」

「脱がんでええからッ!！」

救助する時見えてたから。

「おゝ長門」

酔っ払ってる霞が来た。

さつき真名を交換した。

「陛下を襲うなよ」

「いや襲ってないから」

「ハハハ。まあ頑張るや」

霞はケラケラ笑いながら祝勝会の輪の中に入る。

だから何で頑張るねん。

「……スウ……スウ……」

陛下は寝とるし。

とりあえず、かける物を引いて酔い醒ましに外に出た。

「……ん？」

庭の木の上に水色の髪の女性がいた。

「何をしてるんや趙雲？」

「ん？天城殿か。月を見ながら飲んでいる」

趙雲がスルリと木から降りる。

「どうですか？天城殿もメンマをつまみに一杯？」

「ええで」

それから、しばらく趙雲と酒を飲んだ。

翌朝、一つの急報が舞い込んだ。

「蜀の劉璋様が病で亡くなりました」

使者として嚴顔が来た。

あれ？演技では荊州に送られてなかったか？

「そうか……劉備」

「は、はいッ!!」

「御主、劉璋の代わりに蜀を納めてくれぬか？幸いにも御主は漢の血を引いておるし問題ないと思う」

「は、はいッ!!」

劉備が臣下の礼をする。

「ではよろしく頼む」

「はいッ!!」

劉備が宮殿を出る。

その時、劉備が笑っていたのを俺は気付かなかった。

「趙雲……やっぱ無理か？」

「……そうですね。蜀に着いてからしばらく考えたいと思う」

あれから趙雲には仲間に入らへん？と勧誘してたけど、中々うんとは言わへん。

え？関羽は？

三秒で諦めた。

あれ頭固いし。

「そうか。まあ頑張れよな」

「そちらこそ。またメンマについて話したい」

こうして、劉備軍は蜀に向かった。

第二十三話 終わりを告げる言葉（後書き）

御意見や御感想等お待ちしておりますm
〔
m

第二十四話（前書き）

約一ヶ月ぶりの投稿です。

タイトルが思い浮かばなかった……orz

第二十四話

「…………よく寝たな……………」

あの宴会から抜け出すのは苦勞したな。

あゝ頭痛……。

とりあえず水や水。

「あ、長門さん」

水を求めて廊下を歩いてたら七乃と出くわした。

「おう七乃」

「…………だいぶやられましたね」

七乃が苦笑する。

「…………まさか陛下が酔っ払うとはなあ……………」

俺も昨日の陛下が酔っ払った姿を思い出して苦笑する。

「はい、水です」

「ありがとう七乃。いやあ七乃はいい嫁さんなれるで」

「えッ!?!……そんな／／／／／」

七乃が顔を赤くする。

……可愛いなあ。

「ぶるううわあああああッ!?!?!」

ドカツ!!

バキッ!!

ドガンッ!!

……すっげー地響きしたな。

「……ちよっと行ってくるわ」

「気をつけて下さいね」

七乃が苦笑した。

……ワカメ（バルバトス）にやられた兵士は約二十人か……。

「んで朝から何してんの？」

「……月の訓練だ」

……え？

「月も叫びながらすんの？」

宴会時に董卓もとい月から真名を頂きました。

……月がああ叫び声……。

「……ぶ……ぶるううわああ……へう……」

「……ガフウツ！！Σ（。Д。）」

……お、思わず吐血してしまったじえい……。

「……言っておくが……月の訓練は治癒だ」

「……なるへそ……」

確かに月の武器装備やったら短剣か小太刀くらいしか無理やろな。

「……てかこいつら生きてんの？てかこいつら俺達の兵士やんツ！

！」

よく見たら俺の部隊にいてる奴らやし。

「たまたまだ……」

……ほんまかいな。

「……月、まずはこいつからする」

バルバトスが右腕を骨折した兵士を月に突き付ける。

「へ、へう……」

月がびくびくしてるし。

「月は恐らく僧侶だろう。回復術はファーストエイド、ヒール、ナース、キュア、リザレクションがある。毒等の状態異常を回復させるのはリカバーだ。まあ月ならファーストエイドとヒールくらいまでなら行けるだろう」

……バ……バルバトスが頭いいやて？……。

「……ジェノサイドブレイバーをぶっ放されたいのか？」

お、斧に突き付けられる。

「サーセン」

「ふん……。月、相手を治したいと思う時は治したいという心をず

——玉座——

「へ……陛下。それは真ですか？」

劉協と謁見している美羽が啞然とする。

「うむ、袁術よ。董卓——月の代わりに洛陽を守護してほしいのだ」

「し……しかし陛下。洛陽は既に董卓が守護してるのでは……」

「確かにそうだ……しかしな、洛陽以外の民衆は袁紹が放った檄文を見て、董卓——暴虐非道の人間としか見れてないのだ。檄文を放った袁紹も完全に失敗したと歎いていた」

「……それ陛下を救助した天の御使いを従える妾を新たに洛陽の守護とすると？」

「その通りだ」

劉協は頷く。

「月達はそのまま袁術の指揮下に入らせる」

「……陛下。何か隠していますね？」

美羽が言う。

「……バレたか。実は劉璋が死んだのが気掛かりなんだ……」

「確か報告では病死と……」

「いや……劉璋はそんなにやわじゃない。寧ろ筋肉ムキムキのオッサンだ」

「……………（汗）」

美羽が冷や汗をかく。

「あいつは風邪や怪我なんてものは一切していなかった。持病もない。……余は、劉璋は暗殺されたのだと思う」

「ッ!？」

美羽が驚く。

「確信は無いがな……。蜀に送った劉備には探りを入れるようにしてある」

「……では」

「……漢王朝が沈み始めた現象だ。今に国土は荒れる。そのために袁術、貴女に洛陽の守護を命じたのだ」

「……分かりました。この袁術、陛下の命により洛陽の守護に就任します」

「うむ、頼んだぞ」

「ははッ!!」

——劉備陣営——

「桃香様、明日も早めに出立します」

「うん、分かったよ愛紗ちゃん」

関羽が劉備の天幕を出る。

「……………」

劉備は無言で簡易のベッドに寝転ぶ。

「……フッフ、法正や孟達達は上手くやったようね」

劉備は瓶を取り出す。

「……これでまた一歩近づいた……………」

劉備はニヤリと笑った。

第二十四話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m
〔 m

第二十五話 死せる……生ける……を走らす（前書き）

タイトルで分かると思いますが新キャラです。

ちよつと無理矢理やけど……。

第二十五話 死せる……生ける……を走らす

「え？軍に入りたいと言ってる奴がいる？」

七乃の言葉に首を傾げる。

「はい、しかも軍師としてです」

「（……誰やろ。軍師は七乃や竹中、黒田がいるしな……）」

元董卓軍の兵士は袁術軍の指揮下に入っている。

けど、武將はそう簡単にいかない。（他の軍が欲しいから）

曹操は今だに霞を狙っているしな。

そんなわけで、苦肉の策として霞や月を処刑——死んだ事にしたんや。

董卓と賈クは「陛下に迷惑をかけた」との理由で自害、恋達武將は「我々は董卓様達を守る事はできなかった。もはや生きる意味はない」と曹操達に言って全員斬首になっているけど、（死んでないよ。生き残った十常侍やその私兵を女装させて斬首させた）何進達同様に名前を変えている。

まず、バルバトスは織田信長。

月は織田信雄。

賈ク（今だに真名は貰ってない）は竹中半重治（竹中半兵衛）

音々は黒田孝高（黒田官兵衛）

霞は武田信玄。

恋は上杉謙信。

華雄（今だに真名貰ってない……OrZ）は羽柴秀吉。

ぶっちゃけ戦国時代の武将の名前や。

だって戦国時代好きやもん。

バルバトスの織田信長はバサラネタでやった。

華雄は柴田勝家かで迷ったけど、月の忠誠心から考えると秀吉にした。

でも真名を貰ってない……。

何か真名の話題を無理矢理避けてるし。

……俺嫌われたんかなあ……OrZ

とまあそれはさておき。

「んで名前は？」

俺はお茶を飲む。

「ええと、司馬懿仲達と言っていましたよ」

「ブーーーーーッ！！」

俺は思わずお茶を吐いた。

「うわ汚ッ！！」

七乃、その言葉はきついで。

てか司馬懿かいな……。

「どうします？」

「どうしますて七乃が袁術軍の参謀長やねんから七乃が決めるべきやろ」

「いやあ、長門さんに任すのが得策かなあて」

……あの、何でも俺任せにしないでよ。

「今度、昼メシ奢ってな」

「はい。何なら夜御飯とその後もしますよ」

……七乃……（汗）

「司馬懿仲達と申します」

部屋に入ってきたのは以下にも横山光輝の三国志の文官ですと主張するような服を着て、（でもブカブカ）左頬に傷があった（るる剣の巴の婚約者に斬られた傷と考えたらしいです）

髪は黒で男やな多分。（男の娘にも見えるし）

「試験するんやけど、何しようかなあ」

ポク

ポク

ポク

チーン。

「あ、ええ事思いついた。ちょっと待っとけよ」

「あ、はい」

俺は調理場に行ってゆで卵を持ってきた。

「司馬懿、ゆで卵を立たせてみい。これが試験や」

司馬懿は少し考えていたが、やがて思いついたのか、ゆで卵の先を割って立たした。

「出来ました」

「……合格や。中々なもんやな。他の奴らは分かんかったのに……」

ちなみにバルバトスにしたら「気合いで立てえいッ!!」と言ってジェノサイドブレイバーをされた。

「いえ、天の御使いも中々面白い手を使われますよ」

「ハハハ、おだてても何も出えへんよ。……司馬懿仲達、今日より君は主君である袁術のために、その命を預けてもらう」

「ハ。……ですが、一つだけ訂正してください」

「……何や？」

「袁術様は主君ではありますが、僕は貴方様に命を預けたいのです」

「ほう、その根拠は？」

「……僕は黄巾の乱が始まる前に人々を知るために旅をしていましたが、黄巾の乱では荊門に身を寄せていました」

……ん？

「てことは……」

「はい、あの山の中であの戦いの一部始終を見させてもらいました」
成る程ね。

「見事な指揮に僕は感服しました」

「いやあれはあの場でたまたま出来たもんやし……」

「それでもです。……どうかお願いします」

……まあええか。

司馬懿を手に入れるのはチャンスやしな。

「……分かった、司馬懿仲達。貴様の命、俺にくれるか？」

「……喜んで……」

司馬懿仲達を手に入れた。

「普通に長門と呼んでええから」

「は。僕の真名は瑞姫みずきです」

「よっしゃ、よろしくな瑞姫」

「はい」

……なあんか変な予感するなあ。

その後、他の奴らにも瑞姫を紹介した。

——夜——

「御館、風呂開いたぞ」

「おう」

焰耶がわざわざ言いに来てくれた。

お礼に明日は焰耶と一緒に訓練するか。

——風呂場——

「あゝいい湯やな」

ちなみに風呂の順番は俺が最後や。

男が最初に入ると女は嫌がるやろ？

あれ？反対やったけ？

ガラガラッ

ん？誰が入ってきた？

誰やろ？

瑞姫かな。

あれは男の娘やろね。

俺がそう思っていると、小刀（果物ナイフみたいな）が飛んできた。

ガキンッ！！

……果物ナイフは俺の右横を通って岩に刺さる。

……え？

「…………誰だ？」

「あの……俺やけど……」

「長門様ッ！？」

湯煙から現れたのは……。

「……瑞姫？ え？ 女？」

瑞姫の胸は膨らんでいた。

……アルエ？

男の娘とちゃうの？

「何でおるの？」

「長門様こそ……」

「俺は焰耶に風呂開いたって言われたから来たんやけど……」

「僕も焰耶さんから言われました……」

「てか、瑞姫て女やってんな」

「はい。気がつかなかったんですか？」

「うん。てっきり男の娘やと……。服もブカブカしてたから気がつかなかったな……」

「す、すみません。服はあれしかなかったもので……」

「そらしゃあないわ。まあ突っ立てないで入り。俺は出るわ」

正直、さっきから瑞姫の胸をガン見してるし、何か罪悪感沸くし。

「す、すみません……」

翌日、瑞姫が女とは知らなかったのは全員やった。

瑞姫にはブカブカの服ではなく、瑞姫のサイズに合わせた服を注文したのは完全に余談やろなあ。

第二十五話 死せる……生ける……を走らす（後書き）

御意見や御感想等お待ちしておりますm（ ）m

ちなみに、瑞姫の声優役は白石涼子さんです。（モチーフはおもしろい
つきし姉崎ハヤテ……）

第二十六話 二カ国（前書き）

約二ヶ月ぶりの投稿です。

本当なら4月下旬頃に投稿予定でしたが、間違って消去してしまったんですよね（汗）

何かグチャグチャになってる……。

るろ剣を久しぶりに読んでたら宗次郎を出したいなあと思ってしまった。

まあ出るかは未定。

第二十六話 二カ国

——建業（今の南京辺り）——

「私は反対ですッ!!」

皆が集まる玉座で孫権が怒号を放つ。

「何だ蓮華？何が不満なんだ？」

呉を統治する孫堅が反対する娘に尋ねる。

「袁術との同盟は賛成します。ですが、何で私が同盟の使者をしないといけないんですかッ!？」

「そりゃあ蓮華、お前が適任だからだ。雪蓮は今や呉の王だし、私は小蓮の教育に忙しいんだ」

孫堅（真名夏蓮…かれん）は反董卓連合から帰還した後に、呉王を雪蓮に譲って隠居する事にしたので。

「私たちの時代は終わったんだ」

呉王を退位する時に夏蓮はそう呟いた。

「それに蓮華には時期呉王としていい経験になるはずだ」

「……それは夏蓮殿の感ですか？」

軍師である周瑜（冥琳）が孫堅に尋ねる。

「ああそうだ」

「……分かりました。蓮華様、使者の役目お願いします」

「冥琳まで……分かった。使者の役目、やらせて頂きます」

「頼んだわよ蓮華」

「分かりました」

軍儀はそれで終わった。

終わると、呉の王である孫策こと雪蓮が孫堅に近づく。

「母様。美羽と同盟を結ぶのは何か裏があるでしょ？」

孫堅がニヤリと笑う。

「ああ、長門の身体が逞しくてな。もう一度……な」

「母様、それなら私もよ」

『フフフ……』

二人で笑っているのを周楡と黄蓋は苦笑する。

「天の御使いも大変な人に惚れられたもんじやのう」

「そのようですね……」

周楡は眼鏡をクイッと上げた。

——西涼——

「それじゃあ、おば様は袁術と手を結ぶの？」

馬騰の居城で馬岱が問う。

「ああ」

「河北の袁紹に対抗するためなのか母上？」

「それもあるが、袁紹は攻めてこないさ。なんせ、袁術とは従姉妹だからな。問題は曹操だ」

「何か問題でも？」

馬岱が聞く。

「私は二、三回しか見ていないが、あいつは天下を取る。必ずな」

馬騰が断言する。

「あたしにはちっちゃい奴にしか見えないけどなあ」

馬超が首を傾げる。

「だからあんたは脳筋なんだよ。いいかい？ 袁術と手を結ぶのは曹操の野望を阻止するためでもあるんだよ。反董卓時の曹操軍の半数を倒したあの男が袁術軍にいるんだよ」

馬超はあっと思いつく。

「翠と蒲公英は西涼軍の使者として洛陽に向かうんだ。いいね」

「分かった」

「姉様が迷子にならないように見張っておくねおば様」

「誰が迷子になるかッ!!」

馬超のツツコミが城中に響いた。

今日は仕事が非番なため、洛陽の街をブラブラと歩いている。

「ヒイイツ!!」

ザシュツ!!

ん?

俺が大通りの路地を見ると、新撰組の羽織りを着た隊士達が人間を斬っていた。

「おう仕事か？」

「あ、隊長。洛陽で頻発していた連続殺人犯です」

隊士が俺に説明する。

洛陽にも新撰組を作らせていた。

相変わらず隊長は俺で、副長は樹梨や。

後は風達を一番隊から三番隊の組長にしてる。

だって新撰組好きやねんもん……。

ちなみに新撰組の隊規の第一条「土道二背キ間敷事」はちゃんと入れてる。

そして第二条には「悪・即・斬」を入れてる。

だって斎藤一好きやねんもん……。

「何だ、長門か」

隊士達の先に日本刀が血で濡れている樹梨がいた。

「おう、仕事ご苦労さん。てか殺人犯殺したらあかんやろ」

「大丈夫だ。殺人犯は二人で既に一人は捕縛している。一人いれば充分だ」

それやったらええねんけどな。

「ほんじゃあ頑張ってな」

「ああ」

樹梨達と別れて、俺は一日をゆっくりと休んだ。

そして数日後、西涼と建業から使者が来た。

第二十六話 二カ国（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m
〔 m

第二十七話 風邪と同盟締結（前書き）

同盟締結を主軸にしてたのにいつの間にか風邪の話しが大半になった……。

華雄のナース服……。

第二十七話 風邪と同盟締結

「…………頭がガンガンするう…………」

朝起きたらスゲー身体が熱い。

……絶対に風邪やな。

「隊長ッ!! 朝ですッ!!」

雫が入ってくる。

「雫……悪い。風邪引いたから休むわ」

「風邪ですかッ!?! 分かりました、私が看病しましょう」

雫が持ってきた槍を外に置く。

「移るから止めとけ…………」

「いえいえ、私は平気ですので…………」

雫は水が入った桶を持ってきた。

ビシャアッ!! と雫が布を搾って、俺の頭に載せる。

「しばらく休んで下さい。皆に言っておきますので」

「……お」

俺はそのまま寝た。

——玉座——

「長門が風邪を引いたじゃと？」

雫が美羽達に報告する。

七乃がこっそりと何処かに行こうとする。

「何処に行く気じゃ七乃？」

雫が目ざとく七乃を見つける。

「え、アハハハ、いやあ長門さんの看病をしにでも行こうかと……」

七乃が視線を逸らす。

「ほう、儂らも行きたいのじゃがな……」

雫は槍を持つ。

「すみませんすみませんすみませんすみませんすみません。私が悪かったです」

七乃が土下座をする。

「交代制で御館を看病したらどうだ？」

涼が言う。

「成る程、それで行くのじゃ」

美羽が頷く。

「話しは聞いたッ!!」

Bannonと劉協が入ってきた。

「へ、陛下？」

「朕も長門を看病しよう。なに、助けてくれた御礼じゃ」

「(……それ、ずっと言ってますよね)」

七乃が思う。

「(陛下も看病するって……どんだけ信用されてるのよあいつは……)」

ザワザワと玉座が騒ぐなか、詠が思う。

「……と、いうことで交代制で長門を看病する事になった。一番手は私だ」

何故かナース服を着た華雄がいた。

「……その服は？」

「七乃が街で見つけたらしい。看病する服はこれでいいらしい」

……七乃、グッジョブッ!! (o^ー^) b

「ほらお粥だ」

「おう」

ゴソゴソと起き上がる。

「……ほら……あ……あーん／＼／」

華雄がスプーンにお粥を盛って差し出す。

あーんやであーん。

華雄さん襲っていいですかッ!?

「あーん……うん。お粥やな」

「そりゃあそうだ」

その後、お粥が無くなるまで華雄たんにあーん攻撃をされた。

……もう俺のライフはゼロや……。

「そういや華雄」

「何だ？」

「何で皆に真名を預けてないんや？ましては元主君でもある月にも預けてないんやろ？」

「ッ！？……………」

華雄が驚いた表情をする。

……………絶対に地雷を踏んだな……………。

「……………いつかはバレる事だな……………」

華雄はそう言ってポツリポツリと語りだした。

「私の村では十歳で親から真名を貰えるんだ。だが、十歳になる直前に賊に壊滅されて親を失った。親戚に引き取られたが、これも真名を貰える直前に病で亡くなったんだ……………だから私は真名は無いん

だ」

そう言った時、華雄は泣いていた。

俺はベッドから降りて、華雄を抱きしめた。

「な、長門ッ!？」

あまりの出来事に華雄が顔を真っ赤にする。

「ゴメンな。不用意に言ってしまった」

「……いいんだ長門。之が私の天命なんだ……」

「良かったら俺が華雄に真名を付けるで？」

「えッ!？」

華雄が驚く。

「……いいのか？」

「俺がしたいねんから」

「……では頼む……」

何するかな………そうや。

「華雄の真名は桜の花と書いて桜花てのはどうや?..」

「桜花？」

「俺の世界で春に咲く花の一つや。ぱっと花を咲かせた後、散って行く桜の儚さや潔さが非常に好まれていたり、咲き終えた後には潔く散る姿が綺麗やねん」

「……………」

華雄が黙り込む。

「どうや？」

そして華雄が臣下の礼をした。

「……我が姓は華、名は雄。そして真名は『桜花』ッ！！私の命が尽きるまで貴方を護りますッ！！」

顔を上げた華雄は泣いていた。

今まで真名が無かったから寂しかったんやろなあ。

「頼むで華雄。んでやっぱ華雄のナース服の姿は可愛いなあ……」

「ちょオッ！？／／し、尻を触るなッ！！／／／」

「…………おのれ華雄め……」

部屋の外で二番手の劉協が悔しそうに呟いていた。

三日後、西涼と建業から同盟締結の使者が来て、無事に締結した。

「よう、馬超。馬騰の調子はどうや？」

「ああ長門。母上なら健康だよ」

馬超を見かけたので話し掛ける。

「そうか、それなら良かったわ」

安心やな。

けど、戦いはすぐに始まろうとしていた。

——荊州のとある居城——

「そんな……美羽様がそんな事するはずがありませんッ!!」

城の玉座で一人の少女が吠える。

「いいえ、それが真実なのですよ」

使者らしき男がゆっくりと言う。

そして、吠えていた少女の隣にいるもう一人の少女が席を立つ。

「分かりました。ですが孫乾殿、いきなりの事なのでしばらく時間を下さい」

「雛菊ッ!？」

少女の叫びを雛菊と呼ばれた少女は無視をする。

「ではいい返事を待っていますよ楊弘様」

孫乾が玉座を出た。

「雛菊ッ!!! どうしてあんな事をッ!!」

「……洛陽に美羽様の真意を確かめてもらうために向かった使者が帰ってこないのよ……」

「そんな……。でも零殿や焰耶達はそんな事は絶対にしないはずですッ!!」

「あたしだって、そう願いたいよ。でも皐月、さっき間者から連絡が来たのよ。美羽様があたし達を消す可能性があるかもしれない」

て」

「ッ！？……そんな馬鹿な……」

「……皐月、もう覚悟を決めよ。美羽様の周りには新しい仲間がいるからもうあたし達はいらないのよきつと。おちおちしていたら本当
当に消されるわ」

「……分かったよ雛菊。前線は私に任せて」

「うん」

そして二人の少女は決断したのであった。

第二十七話 風邪と同盟締結（後書き）

やっぱり華雄は可愛いと思います（ギリ

御意見や御感想等お待ちしておりますm（
m

第二十八話 反乱（前書き）

携帯の修理と書き直して遅くなった……。。

第二十八話 反乱

荊州との極秘会談から十日後、孫乾は蜀の成都に戻っていた。

「……劉備様、計画は順調です」

「ご苦労様孫乾。曹操さんと袁紹さんの件は？」

「はい、間者が動いています。報告では三日もすれば、火の手が上がるかと……」

「そう……」

「劉備様」

「何ですか猛達さん？」

「趙雲はどうしますか？あの女、蜀に来てから何かと我等を探ろうとしています……」

「……必要であれば殺っても構いません」

「よろしいので？」

「……既に、軍師の朱里ちゃんや雛里ちゃんもいますし、一人くらい大丈夫ですよ」

「分かりました」

猛達が劉備に頭を下げて、玉座から出る。

「……後少し……後少し……」

劉備はそう呟いた。

——洛陽——

「真桜、『あれ』出来たか？」

俺と樹梨は真桜の部屋を尋ねる。

「お、隊長。出来てるで……これや」

真桜はゴソゴソと何かを出す。

「……これか……」

「ああ、新政府軍の小銃『スナイドル銃』だ」

樹梨がスナイドル銃を持つ。

「戊辰戦争時に、戦死した新政府軍の兵士が持っていたのを我々も使っていたんだ」

なるへそ。

ちなみにスナイドル銃はエンフィールド銃を改造した後装式小銃や。

「それにしても何で覚えてたんや？」

「戦の最中に故障が無いようにと毎日、点検と分解を全隊でしていたからな。無論、私もやっていたからこれが出来たんだ」

なるへそ。

「しっかしなあ。最初試射をした時はびっくりしたで。雷かと思ったわ」

真桜が言う。

まあ銃の音は聞いた事はないからなあ。

「ちょっと撃たしてな」

「ええよ」

中庭に移動して木の板を地面に突き刺して離れて構える。

タァーンッ！！

弾は板の端に命中する。

「腕が悪いな」

「しゃあないやろ。撃った事無いんやし」

エアガンはよう撃ってたけどな。

「こうするんだ」

タァーンッ！！

樹梨が構えて撃つ。

弾は見事に真ん中に命中した。

「おお、経験してる奴は違うな」

「フ、もっと褒めろ」

樹梨がニヤリと笑う。

「ちょっと一体何の音よッ！！」

あ、半兵衛が来た。

「いやなに、小銃の試射をな」

「小銃？あんたこないだは連弩の試射をしてたじゃない」

実は既に連弩は採用してたりする。

まあ防衛用やけどな。

「今度は兵士一人一人が持つ武器や。よく見とけよ」

樹梨から銃を貰って構える。

タァーンッ!!

今度は○の右端に命中した。

「~~~~ッ!? 何なのよ今の音はッ!? 雷かと思ったじゃないッ!
!」

「そんなに怒るなよ。まあこれは火薬も使ってるからな。そのうち慣れるよ」

半兵衛を宥める。

「……確かに貫通してるわね。これがあんたの未来の武器なの?」

「確かに武器やけど、これは樹梨の時代の武器やな。俺の時代の武器は連射とか出来るからな」

「ガトリング砲か?」

「それを小型にした物や、小銃で連射出来る物もあるで」

「ほう、大分進んでるな」

樹梨が感心するように頷く。

「……あたしは全くの置いてけぼりなわけね」

半兵衛が若干イライラしてる。

「スマンスマン半兵衛。んで、これを部隊で使用したいねんけど……」

「……まあいいわ。一応実験で採用してみるわ。威力は今見た事だしね」

ん？デレたか？

「デレてないわよッ！！全く……とりあえず一個大隊分を揃えてみるわ」

「あざーす」

ちなみに部隊は一個中隊とか現代と同じ編成に分けてる。

一人の将に一個旅団から三個師団が戦時の際に編成される。

「お、そこにおったか長門ッ！！大変やでッ！！」

霞が走ってきた。

「どないしたんや霞？」

「はあ……はあ……け、荊州が……」

「荊州がどないしてん？」

「荊州が反乱したんやッ！！首謀者は李豊と楊弘やッ！！」

その瞬間、俺はスナイドル銃を落とした。

……何でや？

何であの二人が……。

事態は急展開になった。

第二十八話 反乱（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m
〔 m

第二十九話 鎮庄（前書き）

遅くなりましたm
〔
m

第二十九話 鎮圧

——玉座——

「荊州で起きた反乱ですが、早急に鎮圧とその原因を調べようと思います」

七乃が美羽に言う。

「うむ、それは妾も思っている。派遣の将は長門、霞、桜花の三人で行ってくれぬか？」

「分かった」

「任しときや」

「うむ」

俺達三人は頷く。

「俺も行きたいがあ……」

バルバトスと言う。

「いやお前が行ったら荊州滅ぶからマジで」

皆がうんうんと頷く。

既に袁術軍の中でバルバトスは最凶になっている。

「ぬう……………」

……何やろか。

月がおるからバルバトスもあんま強く言えへんな。

てか、原作の面影無くな？

『そこら辺はマジですみませんm（mb y作者』

そこで軍儀は終わった。

派遣兵士は六万。

反乱軍は三万やから何とか抑えられるやろな。

ちなみに将は三人やけど、新撰組の部隊も入っているから実質八人
（樹梨、真桜、凧、沙和、雫）になるから問題はない。

——城門——

「隊長。皆集まったの」

沙和が報告する。

「よっしゃ、ほんなら出撃や」

六万の部隊は一路、荊州に向かった。

「なあ長門。雛菊と皐月で何で反乱を起こしたんやろな？」

荊州へ移動中に霞が俺に聞いてくる。

「それが分からへんねなあ。あの二人は美羽を前から守っていたからな」

ちなみに、霞達は雛菊と皐月に紹介して真名を交換しているから普通に真名で読んでいる。

「とにかく、荊州に着いて確かめないとな」

桜花が頷く。

「そうやな。少し進軍速度を速めるか」

俺達は少し早めに荊州を目指した。

「……正々堂々と正面から来たか……」

荊州との国境に反乱軍がいた。

そして、反乱軍の中から皐月と雛菊が出て来た。

「我等を殺せないからといって、よくヌケヌケと来れたもんだッ！
！」

「??? どういう事や？」

皐月が叫ぶ。

「知らぬとは言わさんぞ天城ッ！！貴様らは洛陽に上ったまま、我等とは交代しないどころか我等を邪魔と感じて我等を消そうとした罪は免れないぞッ！！」

はい？

「ちょ、ちょっと待てや皐月ッ！！そんなの俺知らんでッ！！」

「皐月と呼ぶなアアアーーーーッ！！」

皐月が叫ぶ。

「貴様の首をはねて美羽様を我等の手に取り戻すッ！！全軍突撃イ
イイーーーーッ！！」

ドドドドドドッ!!

「な、長門どないすんねんッ!？」

霞が焦るように言う。

「……覚悟を決めるか。弓隊構えエッ!!」

弓隊が構える。

「発射アアアーッ!!」

ビシュビシュビシュンッ!!

弓隊から発射された矢は弧を描くようにして、反乱軍の兵士に突き刺さる。

「行くでッ!! ファイヤーボールッ!!」

火炎弾を反乱軍兵士に放つ。

「イラプションッ!!」

反乱軍兵士の足元から溶岩を吹き出させる。

「ギャアアアッ!!」

「ヒイイイッ!!」

反乱軍兵士の命を次々と刈り取る。

「まだまだアッ！！フレアトルネードッ！！」

反乱軍兵士の足元から大量の火炎弾を吹き出さす。

「グアアアアッ！！」

「ギャアアアアッ！！」

「これで最後やッ！！」

俺は圧縮させた火球を生成する。

「ヒイイイッ！！」

「逃げろオッ！！」

俺の攻撃に耐えられなかった兵士達が後退していく。

「逃がすかッ！！エクスプロードッ！！」

俺は火球を逃げる反乱軍兵士達の真ん中に着弾させた。

ドゴオオオオオオンッ！！

爆風で数百人の反乱軍兵士が空を舞う。

かなり固まったところに命中させたからな。

「今やッ！！全軍突撃イイーーーーッ！！」

『ワアアアアアアーーーーッ！！』

反乱軍が乱れたのを見計らって突撃命令を出した。

「獅子戦吼ッ！！」

風が反乱軍兵士を倒していく。

「調子ええな風ッ！！」

「私はいつでも全力を出しますよッ！！飛燕連脚ッ！！」

飛び掛かってきた反乱軍兵士を飛燕連脚で倒す。

「ちゃっちゃんと皐月と雛菊のところに行くでッ！！」

「はいッ！！」

戦いは袁術軍の有利になってきた。

第二十九話 鎮庄（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m
〔 m

ボツネタ（前書き）

ボツネタの第一話です。

それと、作品を一旦完結させます。

理由は董卓連合の時の袁紹により召集理由とか等の矛盾点があるので。

主人公もチートではなく、少しずつチートになっていくようになります。

御迷惑をおかけしますがご了承下さい m (m

ボツネタ

「曹徳、その部屋を掃除しときなさい」

「はい」

母親の曹嵩に汚物を見るような目で見られながら俺は宴会後の部屋を掃除していく。

「……あら？曹徳はまた掃除かしら？よっぽど掃除が好きなのね」

掃除をしていると貧乳のクルクルドリルが特徴の曹操とお供の夏侯惇と夏侯淵がやってきた。

「それが仕事なのです」

「そう。なら厠も掃除しといてね」

曹操は興味なさそうに言い、夏侯惇も先程の曹嵩同様に汚物を見るような目で俺を見て、二人は何処かに行く。

夏侯淵は申し訳なさそうに俺に頭を下げて部屋を出た。

「さて、片付けるか」

俺は片付けにかかる。

そろそろ俺の自己紹介をするか。

俺の名は曹徳で親は曹嵩、姉は曹操や。

え？頭を打ったて？いやこれが冗談とちゃうねんな。

俺は平凡なサラリーマンやった。（ただし、予備自衛官でもある）

そんなある日、仕事が終わって帰宅途中に乗用車に引かれてんな。

そして気がつけば、昔の中国ぽい家において姿は赤ん坊やった。

そして母親が曹嵩と知った時は驚いたな。

歴史は好きやったから三国志もある程度は知っていた。（横山三

国志やけど……）

でも、もっと驚いたんが姉が真・恋姫の曹操やった事やな。

曹操は正に天才で、十年の一人の逸材らしい。

対する俺は、平凡な大学を出たサラリーマンやったので、知能は普通。

曹嵩は俺に落胆して、教育の全てを曹操に注がせて俺は雑用の仕事ばかりさせてきた。

「……こんなもんやな……」

俺は綺麗にした部屋にふうと息を吐く。

さて、部屋に帰って読書するか。

俺の部屋は廁の近くにある物置に近い部屋やった。

「……………」

俺が読んでいるのは薬草の本やな。

何でそんな本を読んでいるのかというと、もうすぐこの家を出るからやな。

このまま家におったら近いうちに俺は死ぬわ。

そのために、野宿する際に食べれるきのみや薬草を勉強してんねんな。

え？盗賊に襲われる？

まあそうやろな。でも先日、武器庫の片隅に何故かこの時代には無いはずの日本刀があってんな。

しかも二本あって、うち一本は小太刀やし。

路銀もかなり貯めている。

「ま、それより勉強やな……………」

勉強は遅い時間までやった。

そして二日後、俺はとうとうこの家を出る事にした。

正直、曹嵩のイジメに耐えられなかったな。（よく十五年も耐えてたわ。あ、歳は十五な）

皆が寝静まった夜中、俺はこっそりと堀を乗り越えて着地した。

「さて、追っ手が来る前にちゃっちゃと逃げよ」

一応、旅の商人の恰好はしてるけどな。

「…………じゃあな」

俺は生家にそう言って、闇の中に隠れた。

翌日、曹徳がいない事を知った曹嵩は激昂して見つけ次第打ち首にしろと命令をして搜索を開始した。

しかし、曹徳は一向に見つかる気配はなかった。

「……曹徳様……」

私は思わず溜め息を吐いた。

曹徳様の行方が分からなくなって既に三日が経過していた。

私が初めて曹徳様にお会いになったのは七つの時だった。

姉者は華琳様に付きつきりだったが、私は何故かよく曹徳様と遊んでいた。

しかし、曹徳様が華琳様より普通だと知ると途端に両親は曹徳様に近づく事を禁じた。

皆は曹徳様を普通だと言うが私はそうは思わない。

曹徳様は華琳様とはまた違う逸材だと私は思う。

曹徳様……ご武運を祈ります。

曹徳のために夏侯淵は曹徳の武運を祈った。

「さて、何処に行こな……」

確か董卓は涼州におったな。

それに董卓軍は俺の嫁（笑）の華雄がおったしな。

「よし、涼州に行くか」

俺は涼州に向かった。

ポツネタ（後書き）

御意見や御感想等お待ちしておりますm
〔
m

第一話（前書き）

お久しぶりになります。

ボツネタであったのを主軸にしての再投稿となりますが、大帝国が終了してから連載を再開させようと思います。

第一話

「曹徳、その部屋を掃除しときなさい」

「……はい」

母親の曹嵩に汚物を見るような目で見られながら俺はグチャグチャになった宴会後の部屋を掃除していく。

「……あら？曹徳はまた掃除なのかしら？よっぽど掃除が好きなのね」

掃除をしていると貧乳のクルクルドリルが特徴の曹操とお供の夏侯惇と夏侯淵がやってきた。

「……それが仕事なのですよ」

「あらそう。ならついでに厠も掃除しといてね」

曹操は興味なさそうに言い、夏侯惇も先程の曹嵩同様に汚物を見るような目で俺を見て、二人は何処かに行く。

夏侯淵は申し訳なさそうに俺に頭を下げて部屋を出た。

「さて、片付けるか」

俺は片付けにかかる。

そろそろ俺の自己紹介をするか。

俺の名は曹徳で親は曹嵩、姉は曹操や。（一応はな、ほんまは……）

え？頭を打ったて？いやこれが冗談とちゃうねんな。

俺は平凡なサラリーマンやった。（ただし、予備自衛官でもある）

そんなある日、仕事が終わって帰宅途中に乗用車に引かれてんな。

そして気がつけば、昔の中国ぽい家にいて姿は赤ん坊やった。

そして母親が曹嵩と知った時は驚いたな。

歴史は好きやったから三国志もある程度は知っていた。（横山三
国志やけど……）

でも、もっと驚いたんが姉が真・恋姫の曹操やった事やな。

曹操は正に天才で、十年の一人の逸材らしい。

対する俺は、平凡な大学を出たサラリーマンやったので、知能は
普通。

曹嵩は俺に落胆して、教育の全てを曹操に注がせて俺は雑用の仕
事ばかりさせてきた。

「……こんなもんな……」

俺は綺麗にした部屋にふうと息を吐く。

さて、部屋に帰って読書するか。

俺の部屋は廁の近くにある物置に近い部屋やった。

「……………」

俺が読んでいるのは薬草の本やな。

何でそんな本を読んでいるのかというと、もうすぐこの家を出るからやな。

このまま家におったら近いうちに俺は死ぬわ。

そのために、野宿する際に食べれるきのみや薬草を勉強してんねんな。

え？盗賊に襲われる？

まあそうやろな。でも先日、武器庫の片隅に何故かこの時代には無いはずの日本刀があってんな。

しかも二本あって、うち一本は小太刀やし。

路銀もかなり貯めている。

「ま、それより今は勉強やな……………」

勉強は遅い時間までやった。

そして十日後、俺はどうとうこの家を出る事にした。

正直、曹嵩のイジメには耐えられなかったな。（よく十二年も耐えてたわ。あ、歳は十九な）

皆が寝静まった夜中、俺はこっそりと塀を乗り越えて着地した。

「さて、追っ手が来る前にちゃっちゃと逃げよ」

一応、旅の商人の恰好はしてるけどな。

「…………じゃあな。糞共」

俺は生家にそう言って、夜の闇の中に隠れた。

翌日、曹徳がいない事を知った曹嵩は激昂して見つけ次第打ち首にしろと命令をして搜索を開始した。

しかし、曹徳は一向に見つかる気配はなかった。

「……曹徳様……」

私は思わず溜め息を吐いた。

曹徳様の行方が分からなくなって既に三日が経過していた。

私が初めて曹徳様にお会いになったのは七つの時だった。

姉者は華琳様に付きっきりだったが、私は何故かよく曹徳様と遊んでいた。

しかし、曹徳様が華琳様より普通だと知ると途端に両親は曹徳様に近づく事を禁じた。

皆は曹徳様を普通だと言うが私はそうは思わない。

曹徳様は華琳様とはまた違う逸材だと私は思う。

曹徳様……ご武運を祈ります。

曹徳のために夏侯淵は曹徳の武運を祈った。

「さて、何処に行こな……」

確か董卓は涼州におったな。

それに董卓軍は俺の嫁（笑）の華雄がおったしな。

「よし、涼州に行くか」

俺は涼州に向かった。

第一話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m
〔 m

第二話（前書き）

連載復活です。主人公は徐々に強くしていきます。

活動報告にも書きましたが三羽烏は魏におった方がいいのか、それとも主人公側におった方がいいのかどっちがいいですか？

第二話

「……やっと涼州に着いたな……」

流石に徒歩で涼州まで行くのはしんどかったなあ。

「とりあえず、宿に入って疲れを癒したいわ」

山賊とか盗賊に出くわして、身体から血の臭いがしてるしな。

「ん？」

何か人だかりがあるな。

「ちょっとすみません」

人だかりの中に入っていくと、董卓軍兵士の募集のおふれが出ていた。（姜族が暴れているため）

「募集は明日の正午までか……」

募集の場所は城か。とりあえず宿で一夜を過ごせるな。

「宿に行こ」

一夜を過ごしてから募集に応募するか。

路銀が少なくなってきたからな。

その後、宿に入って血の臭いとかを洗い落したりして備えられたベッドに倒れた。

——翌日、董卓の居城——

「すみません、兵士募集で来たんすけど………」

受付のところで募集の場所を聞いて行くと、そこは訓練所みたいなところやった。

「む？新しい募集者か？」

訓練所には俺の嫁がおった。

「はい。ところで後ろの人の山は？」

「ん？訓練で鍛えていたところだ」

………はあ。

「私は董卓軍の将の華雄。後ろで酒を飲んでいるのは同じく将の張
遼だ」

「よろしゅうなあ」

張遼が酒瓶を上にあげる。

「はあ」

「試験は私に一本でも入れたら勝ちだ。これを貸す」

華雄から刃を丸めた剣を渡される。

「あ、ども」

「何か質問はあるか？」

「そうやなあ。俺が勝ったら華雄と張遼は俺の嫁でおK？」

「……………」

あの、黙らないで下さい。

「……一瞬で片付けてやる……」

「それは死亡フラグやけど……………」

「黙れエエエーッ!!」

華雄が襲い掛かってくる。

俺は迫り来る金剛爆斧こんごうばくふをギリギリで避けた。

「ほう……よく避けたな」

「そんなヘナチヨコな太刀筋やったら避けれるわ」

「何だとッ!!」

華雄が振りかぶって、金剛爆斧を振り下ろした。

俺は太刀筋を見て、避ける。

「なッ!?!」

「今度はこっちゃッ!! 虎牙破斬ッ!!」

華雄を下から斬り上げて、威力は弱め肩を叩いた。

ぶっちゃけテイルズやな。

せめて何か出来ないかと思って、昔から身体を鍛えながら練習していたんや。

今のところは虎牙破斬と閃空裂破が出来る。

他は修業中やな。

「ぐッ!!」

華雄が地面に叩きつけられた。

「一本取ったで？」

「…………私の負けだ…………」

…………これで勝ちやな。

「ああ、嫁の件はあんたを挑発するためやからな」

「何ッ!？」

「まあ俺としては嫁でもええんやけどな」

「むむむ……………」

唸るなよ華雄。

「あんさん、中々やるなあ」

「まあ、此処に来るまでに山賊や盗賊と死合いをしてたからな」

「成る程な。兵士としては採用や。多分、兵士というより一部隊をやるかもな」

「えゝ」

「何で、嫌そうな顔すんねん」

「だって、部隊長になったら酒とか飲まれへんやん」

「……………あんたは仲間やッ!!」

何故か張遼に手を握られた。

「ウチも酒が生き甲斐やのに賣クっちは酒を取り上げるねんで……」

「そらあ苦勞したな」

「ほんまやで。あ、そういやまだ名前を聞いてなかったな」

……………忘れてた。流石に曹徳はあかんしなあ……………。

……………そうや。

「性は織田、名は信長や」

まあこの時代に信長はおらんしええやろ。

「変な名前やな。ウチは張遼や」

「よろしくな張遼」

「ああ、よろしくな織田」

「私は華雄だ」

「ああよろしくな」

いやあそれにしても、華雄に勝てるとはな。

華雄はゲームでも関羽に討たれてるけど、猪突猛進を無くしたら化けると思うねんけどな。

「そうや織田。賈クっちに会わへん？」

「何でや？」

「織田っちやったら一部隊の隊長にいけるからな。酒とか冗談抜きで」

……流石は將軍で事かな？

「いや、普通に路銀を貯めてから旅に行こうかなあと思ってたんやけどな」

「へえ、そうなんか。なら、貯めるまでおったらええやんか。客将とかで」

……そんな呑気でええんか？

「ほらほら、ちゃっちゃと行くで」

「わ、分かったから押すなよ」

俺は張遼に押される感じで賈クの場所に向かった。

第二話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m
〔 m

第三話（前書き）

ルートは前回同様に袁術ルートを目指す予定です。

長門「なら何で董卓ルートなんや？」

……まあ気にするな。

長門「おい……………」

第三話

「コイツを一部隊長に？却下よ」

「……ほらな」

「何でや賈クっち」

張遼に連れられて賈クの元に來たけど、あえなく却下となった。

「いきなりアタシのところに來たと思えば、ただの一般兵士を一部隊長にしろって……あんたまた酒を飲んでるんじゃないでしょうね？」

「酒は飲んでないわ賈クっちッ！！な、ならウチの部隊に入れてええやろ？」

「……それならいいわ」

「流石賈クっちや」

そらあ、張遼の部隊に入れるんなら問題はないからな。

「ほんじゃあな賈クっち。ほら織田も行くで」

「分かった分かった」

俺は引っ張られながら部屋を出た。

「……一体、何なのかしら？」

一人だけになった部屋で賈クはそう呟いた。

「それじゃあウチの副官をやってな」

「仕事は俺に任して、自分は酒を飲むんか？」

「ギクギクッ！！Σ（。Д。）」

そら分かるわ。

「で、副官の仕事は何をすんねん？」

「ま、まあウチの補佐役やな。主に書類が多いけどな」

「ならさっさとして酒飲もうや」

「それもそうやな」

こうして、ただの一般兵士の募集に來ただけなのに、何故か張遼の副官をやらされる事になった。

数日後、俺は何となくやけど副官の仕事を覚えてきた。

まあ張遼がよく逃げ出すのを防いでるけどな。

「そうや織田っち。明日は戦やで」

「ああ。だからその準備をしてんねん」

明日から、暴れている姜族を鎮めるために出発すんねんな。

「どうや？初出陣の前祝いに飲むか？」

「阿呆か。酔っ払ってたらやられるやろが……」

「ウチは大丈夫やけど……」

「それは張遼だけや」

俺は溜め息を吐いた。

翌日、張遼隊と華雄隊五千名は出発した。

俺には人生初めての大規模な戦いやな。

涼州に来るまでは盗賊や山賊と戦ってきたけど、今回は違うな。

「何や織田っち、緊張しとんのか？」

張遼が聞いてきた。

「ああ。人生初めての大規模な戦いやからな」

「そうなんか。まあ馴れたら後は普通やで」

「そうか………」

そして、俺達は戦場に到着した。

「相手は姜族やッ!! 油断すんなよッ!!」

「全軍突撃イイイーッ!!」

『ウワアアアアアーッ!!!!』

一斉に兵士達が姜族に駆け出した。

「行くで織田っちッ!!」

「あ、ああ」

まだ乗馬の練習は三日してないけど、何とか馬を操って俺も戦場に突撃した。

ザシュッ!!

「ギャアアアッ!!」

兵士が腹を剣で切り裂かれ、腸が露出する。

また、ある兵士は首を斬られて、斬られた箇所から血が噴水のよう
に噴き出す。

四肢のどれかを斬られて倒れる兵士や姜族……………。

……………これが……………。

「……………これが戦場なんやな……………」

現代やと銃撃戦とかやけど、これは記憶に残るな。

それでも吐き気はしない。

理由としては、涼州に来るまでに数回、山賊や盗賊達と戦って死
体を何回も見てるからやな。

しつこい説明やけど気にするな。

「ウオオリヤアアアッ!!」

槍を持った姜族の兵士が俺に突撃してくる。

「ハアッ!!」

ザシュッ!!

俺は槍を切って、兵士の首を斬る。

血が噴き出して俺に降り懸かる。

「ウオオリヤアアッ!!」

また来た。

「ウオオオオッ!!」

俺は斬られないように避けて、相手の命を奪っていく。

「ん？」

ふと人だかりを見ると、張遼が姜族の兵士に囲まれていた。

「ちいッ!!」

俺は人だかりに走った。

俺の接近に気づいた姜族の兵士が槍や剣を構えた。

「どけえええッ!!」

俺は叫んで兵士を斬っていく。

「織田っちッ!？」

「無事か張遼ッ!!」

何とか囲みを斬っていくと、切り傷がありながらも孤軍奮闘している張遼がおった。

「ありがとな織田っち。ハアアアッ!!」

張遼が俺の突撃に怯んだ姜族の兵士達の隙について切り捨てていく。

「ヒイイイッ!!」

遂に、姜族の兵士達は囲みを解いて逃げ出していく。

「……助かったで織田っち……」

「無事でよかったわ張遼……」

まあ將軍が死んだら部隊は終わるからな。

………ん?

「張遼ッ!!」

俺は近くの岩に何かが動くのを見つけた瞬間、俺は張遼を抱いた。

「お、織田っちッ!？」

張遼がいきなり事で顔を赤くしているが、知らん。

ドスドスッ!!

軽い衝撃が来た。

「……華雄ッ！！お前の近くの岩に伏兵やッ！！」

「分かったッ！！」

岩の近くにいた華雄に向かって叫び、華雄は弓を持った伏兵を切り捨てた。

「……これで大丈夫やな……」

「ッ！？織田っち、怪我……」

張遼が俺の背中に打ちつけられた矢を見た。

「医師は何処やアアアアッ！！」

張遼の叫び声を聞きながら、俺は意識を失った。

第三話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m
〔 m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8698/>

真・恋姫†無双（仮）

2011年12月7日00時49分発行